

オーストリア

とっておきの時間が
見つかる旅

ポケットガイド
austria.info
#feelaustria



オーストリア
心弾むシンフォニー

二 オーストリア 心弾むシンフォニー

オーストリアは、アルプスからドナウ川、さらには東のパンノニア平原に至るまで、すばらしい自然景観に溢れています。これら絶景の他にも、この国の特徴の源となっている見どころや歴史、興味深い物語、美食は枚挙にいとまがありません。

しかしながら、いかにアルプスが感動的でも、いかに湖水が透明でも、いかに町が美しくても、結局のところ、オーストリアを特別で素晴らしい国にしているのは、そこに住む人々であるというのは間違いありません。オーストリア人がユニークで、居心地の良いスタイルで生活を送っていることや、個性的で独特なユーモアを持っていることはよく知られています。皆様もこの国を訪れ、よい生き方を求めるオーストリア人の精神性にぜひ触れてみてください。

オーストリア政府観光局



P. 3
オーストリアについて
オーストリアの芸術やグルメ、
歴史、地理などをご紹介します



P. 30
ウィーンについて
ウィーンの見どころ
ウィーン市街地図
ウィーンの郊外へ



P. 38
ザルツブルクについて
ザルツブルクの見どころ
ザルツブルク市街地図
ザルツブルクの郊外へ



P. 44
グラーツについて
グラーツの見どころ
グラーツ市街地図
グラーツの郊外へ



P. 48
インスブルックについて
インスブルックの見どころ
インスブルック市街地図
インスブルックの郊外へ



P. 51
インフォメーション
旅に役立つ基本情報

発行：オーストリア政府観光局 Austrian National Tourist Office
編集&デザイン：株式会社東美 発行日：2022年3月 記載内容は変更されることがあります。
施設のオープン状況、イベントの開催については各ウェブサイトでご確認ください。

時代を駆け抜けた皇妃 エリザベート

シィイの愛称で知られる皇妃エリザベート。
今も人々に愛され続けるエリザベートは
様々な顔を持つ魅力的な女性でした。



2022年、脚本・作詞ミハエル・クンツェ、作曲シルヴェスター・リーヴァイによるミュージカル『エリザベート』が、1992年にオペラ演出家として名高いハリー・クプファーの演出により、アン・デア・ウィーン劇場で初演されてから30年を迎えました。

世界各地で上演されたこのミュージカルは、終焉を迎えつつある古い考えの帝国時代にありながら、現代的な感性を持つエリザベート皇妃の謎に包まれた半生を描いた物語です。若くしてハプスブルク家に嫁いだ美貌の皇妃エリザベート。しかしそこには、伝統と格式を重んじる厳格な宮廷での生活が待っていました。軋轢の中で苦しみ様々な困難に遭遇した彼女は、自由を求めて放浪し、いつしか「トート（死）」の誘惑に惹かれていくようになります。

ミュージカル『エリザベート』は、ドイツ語によるオリジナルミュージカルでは、史上最大のヒット作として知られ、1996年からは宝塚歌劇団の公演が始まり、2000年からは東宝版も上演され、現在では日本におけるミュージカル演目のスタンダードになっています。

ミュージカル初演30周年を記念して、このページでは史実に基づいたエリザベートの生涯をたどってみましょう。

エリザベートは1837年12月24日、クリスマスイヴに生まれました。父親はバイエルン公マキシミリアン・ヨーゼフで、彼女はヴィッテルスバッハ公爵家の子孫にあたります。バイエルン王国の名門ヴィッテルスバッハ家は、神聖ローマ帝国の皇帝を2人も輩出した名門中の名門貴族。エリザベートは、ミュンヘンから30km程離れたシュタルンベルク湖のほとりに立つポッセンホーフエンの館で、自由に開放された教育を受けて育ちました。1853年8月18日、15歳のエリザベート公女は従兄弟にあたるオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世と婚約します。もともと、エリザベートは初めからオーストリアの歴史で大きな役割を果たすべく運命づけられていたわけではありませんでした。彼女の姉ヘレーネが、もともととは皇帝の妃になると考えられていたのです。



しかし、フランツ・ヨーゼフがエリザベートの姿を目にしたときから、彼の心はシシィに奪われてしまっていたのです。

『サウンド・オブ・ミュージック』の世界ザルツカンマーグートの湖畔の街セント・ヴォルフガングは、古くから巡礼地として有名な町で、1640年の記録に記されているほど、由緒ある「白馬亭」という名のホテルがひっそりとたたずんでいます。ここでシシィとフランツ・ヨーゼフは二人だけの時間を過ごし、愛を深めました。恋するフランツ・ヨーゼフはシシィの滞在先であるバート・イッシュルの「ホテル・オーストリア」へ駆けつけ、出会ってからわずか1時間の間で二人は婚約をしたのです。

婚礼は翌年の1854年4月24日、宮廷結婚式の舞台であるウィーンのアウグスティーナー教会で盛大に執り行われ、美しい皇妃はウィーン市民から熱烈な歓迎を受けました。このアウグスティーナー教会の見どころは、女帝マリア・テレジアの四女、マリー・クリスティーネの大理石のモニュメントです。彼女は女帝に一番可愛がられ、珍しく恋人と結婚をすることが許された皇女でした。婚礼後、二人はシェーンブルン宮殿で暮らします。革命政府軍占領時、ナポレオンが居住したあと放置されていたこの宮殿を、フランツ・ヨーゼフはエリザベートとの婚礼を機に改修しました。第2のロココとも呼べる華麗なスタイルの宮殿で、この美しい皇妃を迎え入れたのです。

エリザベートは4人の子供をもうけました。1855年にソフィー、1856年にギーゼラ、1858年に皇太子ルドルフ、そして1868年に

一番愛された娘のマリー・ヴァレリーが誕生しました。子供たちは皇室の習慣に従い、末娘のマリー以外は母親自身が育てることはありませんでした。

エリザベートは皇室の伝統やしきたりによって縛られることを嫌い、課せられた掟に従うことを片っ端から拒否しました。とりわけ、立ち居振る舞いについて厳格な規則を定めた「スペイン式宮廷作法」を守ることを強く拒んだのです。彼女は、母親として、妻として、そしてハプスブルク家を代表する一人としての生活を拒み、だいに引きこもって暮らすようになりしました。エリザベート皇妃の美しさは広く知れわたり、絶えず話題になりましたが、彼女は公的な生活からますます遠ざかっていきました。オーストリアのファーストレディに対する期待に応えるような生活に背を向けたのです。

様々な葛藤や確執により、彼女は自分の殻に閉じこもってしまいます。そのストレスを発散

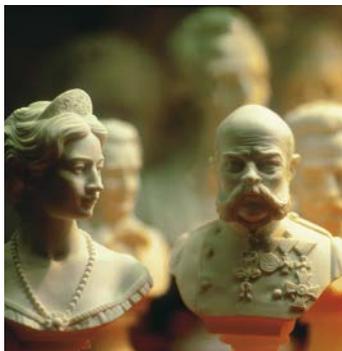


FOTO © Österreich Werbung / Cross Media Redaktion, Hans Wiesenhöfer

FOTO © Österreich Werbung / Cross Media Redaktion



させるため、ホーフブルク王宮内にバスタブやスポーツ用つり革などを作らせました。ホーフブルク王宮を訪ねたら、絶対に見逃さないでください。運動器具のある宮殿は、世界中でもウィーンだけかも知れません。

いつしか、宮廷生活と大妃ソフィーから逃げ出すように、旅に魅せられたシシィはヨーロッパ中を一人で旅するようになります。ウィーン西側の町外れにある広大なライツ動物公園内にあるヘルメスヴィラは、皇帝フランツ・ヨーゼフが彼女のために1886年に建てさせた離宮です。しかし、彼女をウィーンにとどめておくための役には立ちませんでした。シシィ自身が名付けたこの別荘は、ルネサンス様式の瀟洒な建物で、彼女のサロンの天井には、一部クリムトが描いたフレスコ画や、色ガラスの窓、体操室、大理石のレリーフなど、贅を尽くし趣向を凝らした造りになっています。

1880年代の終わりには、エリザベートは完全な引退生活に入り、その後の彼女と親しい接触を持ち続けたのは、末娘のマリー・ヴァレリーだけでした。マリーが母親をいかに深く理解していたかは、彼女の日記に記されています。「私の母は変わった生活を送っていました。彼女は、頭の中では過去にすがる一方、心の中では遠い未来を熟慮し、実際の生活は実体のない幻から成り立っていたのです。」

1889年、皇太子ルドルフがマイヤーリングの狩りの館で自殺を遂げました。オーストリア皇太子と男爵令嬢マリー・ヴェツェラの心中

事件は当時、ヨーロッパのみならず世界中に衝撃を与えるショッキングな出来事でした。後に「うたかたの恋」として人々に語り継がれ、悲劇の舞台となったこの狩りの館は、シシィの命によりネオゴシック様式のカルメル派修道院に建て替えられました。この事件以降、エリザベートは黒の衣装しか身に付けなくなり

ます。そして、失意の中、旅を続けていた彼女に運命の日が訪れます。

1898年9月10日、エリザベートは警察の警護を拒み、ホーエンエムス伯爵夫人の偽

名でジュネーブに滞在していました。レマン湖畔にあるボー・リヴァンジュ・ホテルから外出した際、ヤスリのような鋭利な刃物で心臓を一突きにされ、暗殺されたのです。犯人の無政府主義者ルイジ・ルケーニは、「貴族なら誰でもよかった」と調書で語っています。

エリザベート皇妃については、生前も信じられないような噂が伝えられていましたが、その衝撃的な死によって、彼女は伝説的な存在となったのです。

彼女の死後、ウィーンの市民庭園（フォルクスガルテン）に記念像が設置されました。1907年に除幕式が行われて以来、ブルク劇場を背に、美しい庭園を眺めながら、エリザベート皇妃は静かに微笑み続けています。

『エリザベート』コンサート in シェーンブルン宮殿

2019年以降は、シェーンブルン宮殿の野外舞台上でミュージカル『エリザベート』のコンサートが企画されています。

エリザベートをたずねて

オーストリア政府観光局では、エリザベートゆかりの地をGoogleマップに登録しました。シシィやフランツ・ヨーゼフ1世が実際に歩き、愛した場所を集めましたので、旅のプランに役立ててください。



3人の偉大な音楽家 モーツァルト、ベートーヴェン、 シューベルト

音楽を抜きにしてオーストリアは語れません。
オーストリアゆかりの3人の偉大な音楽家をご存知ですか？
心の琴線を調律して音楽の国オーストリアへお出かけください。



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791)

世界の著名な作曲家の中でも最も重要な人物の一人であるヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは1756年、ザルツブルクのゲトライデガッセ通りにある、現在は明るい黄色の建物(モーツァルトの生家)の3階で生まれました。ここは、彼が子供時代をずっと過ごした場所でもあります。父親のレオポルド・モーツァルトは、早くから息子の音楽的才能に気付き、ヴォルフガングの音楽的活動を奨励し促進しました。彼が4才になると、小さなモーツァルトはピアノと作曲の教育を受け始めました。そして6才になると、ウィーンの宮廷訪問を含む、初めての演奏旅行へと出発します。

「旅は人の視野を広げる」とよく言われますが、これは特に音楽家に当てはまるようです。この言葉は、彼の父レオポルド・モーツ

ルトの持論でもありました。モーツァルトは35年の生涯のうち、何と10年間に旅に費やした計算になるそうです。訪れた街の聴衆は、神童モーツァルトのピアニストとしての妙技に歓喜し、その驚くべき才能は、この旅路によってヨーロッパ中に知れ渡りました。しかし、当時旅の主な交通手段は馬車によるものだったので、大変時間がかかり、辛いものでした。ザルツブルクからウィーンに行くにも、優に一週間はかかりました。モーツァルトは人生の内の10年間という時を費やして、合計17回のコンサートツアーを行いました。

彼の素晴らしい作品は、旅なしでは生まれ得なかったであろうことは、容易に想像がつかます。モーツァルトはヨーロッパの大都會で、その作品によって聴衆の心を捉えただけでなく、街からも多くの作品のアイデアやインスピレーションを得るといふ恩恵を受けていたのです。例えば、イタリアを例にとってみると、モーツァルトは作品にイタリア・オペラの型通りの要素を取り入れたり、

ヴェニスのおペラ脚本家ロレンツォ・ダ・ポンテと共同で作品を制作したりと、いかに多大な影響を受けたかが明らかです。今日、モーツァルトの作品が均質なもののような印象を与えているとしても、実はそれらは、文化が異なる様々な地域から得た影響や着想などの集合体なのです。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは合計626もの作品を作曲しましたが、彼は当時としても短命で、わずか35才までしか生きられませんでした。モーツァルトは12才になるまでに、既に3つのオペラ作品、6つの交響曲と何百もの作品を作曲しています。その天才的な才能は、当時の人々を感動させただけではなく、モーツァルトの驚異的な作曲に対する人々の感嘆は、今なお生息が続いています。そして、現在に至るまで「モーツァルト・マニア」の熱情は少しも衰えてはいません。実際に、ビジネス的にも、その他の様々な事においても、モーツァルトほど成功を収めたミュージシャンはいません。オーストリアのポップスター、ファルコは1986年に米国のポップチャートを「ロック・ミー・アマデウス」という曲で急襲し大ヒットを飛ばしました。ミロス・フォアマン監督は、映画『アマデウス』で、1984年に8つの部門でオスカーを獲得しました。ウィーンのアン・デア・ウィーン劇



場では、ミュージカル「モーツァルト」の公演で連日満員という大ヒット興行成績を収めました。彼の肖像画は、オーストリアの1ユーロ硬貨を美しく飾っているだけではなく、有名なザルツブルクのモーツァルトクーゲルンにも見られます。この前代未聞の偉大なる音楽の天才にまつわる、数え切れないほどの伝記、小説、伝説が「モーツァルト・ブランド」の観客動員力の凄さを証明しています。モーツァルトのブランドは、現在の価値に換算すると、50億ユーロにも相当するそうです。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770-1827)

1770年12月、ドイツのボンにおいてルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、ケルン選帝侯付の音楽家である父と宮廷料理人の娘である母の間に生まれました。幼いうちから才能に恵まれていたベートーヴェンは14歳にして正式に宮廷楽師となり、そして1787年には、さらなる勉強のため、当時ウィーンで活躍していたモーツァルトへの弟子入りを試みます。かねてから憧れを抱いていたモーツァルトでしたが、多忙を理由に師事を断られ、さらに母の危篤の知らせによりボンへ戻ることとなります。22歳のときに再びウィーンを訪ねましたが、モーツァルトは早世していたためハイドンやサリエリ、アルブレヒツベルガーらに師事します。以降35年間にわたりウィーンで暮らし作曲活動をしました。





ウィーンでの生活は順調で、ピアノの即興演奏や作曲活動で名声を得ていきました。彼にはルドルフ大公、キンスキー公爵やロコヴィッツ公爵のパトロンがあり、毎年年金を保証されていました。また、ウィーン会議のおかげで豊かな収入があったともわれています。そんなベートーヴェンですが、生涯独身を通しました。一説によると、身分違いの若き伯爵夫人との悲恋により、彼女への報われない想いを貫いたのではないかということです。ベートーヴェンは多岐に渡って楽しみを見つけていたと知られていますが、特にコーヒーが大好きでした。当時、温かい飲み物は高級品でしたが、ベートーヴェンは自分のコーヒーマシンを持ち、特別なこだわりをもってコーヒーを淹れていました。それは常に正確に60粒のコーヒーマシンを使用したということです。

5歳のときに患った中耳炎が原因で、20代後半の頃より持病の難聴が徐々に悪化します。ひどくなる聴覚障害の治療のため、彼はハイリゲンシュタットにあった保養施設を頻りに訪れました。しかし失意のベートーヴェンは、その絶望感から何度も自殺を考えました。現在はベートーヴェン博物館として改装されたアパートで有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」を書きました。しかし、この「最後」の手紙は弟たちに送られることはありませんでした。音楽への情熱を胸に立ち上がり、困難の中、珠玉の作品群を作り上げたのです。この家でも交響曲第3番『エロイカ』を手掛け、その後ここで彼の最大の作品である交響曲第9番にも取り組みました。ハイリゲンシュタットを始め、このウィーン19区のデブリングを歩きながら、偉大な作曲家が生活した景色と一緒に辿ってみてください。

ベートーヴェンが音楽界へ与えた影響は大きく、この時代の音楽様式を高いレベルに発展させ、古典派からロマン派への架け橋となりました。

1827年3月にベートーヴェンが世を去ったとき、ヴェーリング墓地で行われた葬儀には2万人もの人々が参列しました。当時のウィーンの人口からすれば、10人にひとりのウィーン市民が参列したことになります。ヴェーリング墓地の閉鎖に伴い、60年後、ベートーヴェンの墓はウィーン中央墓地の名誉区32aに移されました。

フランツ・シューベルト (1797-1828)

ウィーンに生まれ、ウィーンで生涯を過ごした作曲家フランツ・シューベルトは、歌曲(リート)の王と呼ばれています。彼はあらゆる音楽ジャンルで秀でていましたが、作曲した曲には600を超える歌曲があり、美しいメロディーという点でいえば、この歌曲の王は間違いなく、音楽史上最も創造的な作曲家であることは確かでしょう。シューベルトはゲーテの『魔王』や『糸を紡ぐグレートヒェン』などの詩を楽曲にしました。彼の曲には、これまで誰の楽曲からも得られないような力強い光と闇の謎めいた魅惑が感じられます。作曲家フランツ・リストは、シューベルトのことを「未だかつてない最も詩的な音楽家」と称しました。

FOTO © Museen der Stadtgemeinde Baden/Thomas Magyar

FOTO © Österreich Werbung/Niklas Stadler, Gerhard Trumler



シューベルトは子供の頃とても美しい声を持っていたので、早い頃から宮廷の聖歌隊員になりました。11歳の時、彼はドクター・イグナツ・ザイベル広場にある宮廷市立大学に入学しました。モーツァルトの有名な同僚でシューベルトの教師になる予定だった宮廷指揮者アントニオ・サリエリは、シューベルトの才能をすぐに認めました。

言い伝えによるとシューベルトは、目が覚めたらすぐに作曲のアイデアを書き留められるようにと、眠っている時でも眼鏡をかけていました。31歳で亡くなるという短い生涯ながら、現在確認されている楽曲は1,000近くを数えます。シューベルト曰く、「私は作曲するためだけに、生まれてきたのです」と残した言葉どおりの人生でした。午前中は作曲、午後は散歩を楽しんだり、友人たちの集まりでピアノを弾いたりしました。特筆すべき2つの重要なことは、この天才作曲家が生涯、自分のピアノを持たなかったことと、彼の公のコンサートはたった一度だけ、死ぬ7ヶ月前に開かれた、ということです。

シューベルトはベートーヴェンが亡くなった翌年の1828年11月、兄のフェルディナントのアパートで亡くなりました。その時、フランツはまだ31歳でした。彼は治癒していない



梅毒に苦しんでいましたが、直接の死因はチブスだったようです。アパートはきしむ木の床と白塗りの壁の小さな3部屋からなる建物で、現在は博物館となっており、本物のシューベルトの遺髪や、兄のピアノ、彼が最後に書いた歌曲『鳩の便り』を含むオリジナルの楽譜の複製などを見ることができます。シューベルトは、現在はシューベルト公園となっている旧ヴェーリング墓地のベートーヴェンの墓の隣に埋葬されました。彼はベートーヴェンを非常に賞賛していましたが、彼の恥ずかしがり屋の性格が妨げとなって、憧れの音楽家であったベートーヴェンには生涯、直接会うことはありませんでした。彼らは死後、初めて親密になることができたのかも知れません。1888年、シューベルトの遺骨は、ウィーン中央墓地(グループ32 A、番号28)の墓に移されました。シューベルト公園の元の墓所には、友人の詩人フランツ・グ Rilパルツァーが「ここに豊かな音楽芸術の財産が眠る。しかし、もっと明るい希望の光が残された」との碑文を入れた墓碑を捧げました。

現在、シュヴァルツェンベルクとホーエナムスで行われる「シューベルティアード」は、45年以上もの歴史があり、世界最高峰のシューベルト音楽祭として世界中のシューベルトファンを魅了しています。ホーエナムスで5月と10月に開催、シュヴァルツェンベルクで6月と8月に開催されています。

自然保護と観光、 イーゼル川50年の闘い

ここは、ヨーロッパで最後に残った
自由に流れる氷河を水源とする川の素晴らしさを体験し、
自然環境に対する人々の認識と理解を深めることができる
冒険の地です。



東チロルのイーゼル川は氷河を水源とし、ダムがなく自由に流れる川ではオーストリア最後の川です。ダムやその他の人工建造物にまったく遮られることなく、ホーエ・タウエルン国立公園の巨大なレートシュピツェ頂上近くのウムバルケース氷河からドラヴァ川との合流点まで流れています。

1971年に、東チロルに巨大な水力発電所を建設する計画が立てられ、貯水池を満たすためにすべての氷河の流れを中断し、迂回させることが提案されました。自然保護論者のヴォルフガング・レッターのような個人の不屈の努力のおかげで、イーゼル川は今日のように存在しています。発電所の計画に対して、レッターは東チロルにレクリエーション景観保護協会を設立し、川の保全のためのキャンペーンに専念し、有名な科学者の講義を企画し、地元の人々にこの地域の卓越した自然のままの素晴らしい環境を維持することが絶対に必要であると説得しました。

何十年にもわたる努力の末、とうとう2015年にイーゼル川は「ナチュラ2000保護地域」に指定され、このネットワークによって、価値

がありながら脅威にさらされているヨーロッパの動植物生息地であるこの地区は保護されました。そして、5年後の2020年に、川の名を冠したハイキングコースが開通しました。環境保護論者で自然写真家のマティアス・シックホーファーとのコラボレーションで開発されたイーゼルトレイルは、ただ単に行楽客やハイカーが辿って楽しむためだけの新しい道ではありません。このトレイルは、川と周辺にもう一つの保護層を追加し、ヨーロッパの残りの氷河を水源とする川が直面している闘いに対して、国民の意識を高め、資金を増やし、理解を深めることを目的としています。レッター自身の言葉を借りて言えば、イーゼルトレイルは「イーゼル川を囲む防護壁の最後の石」のようなものです。

FOTO © TVB Ötztal/ Ramona Waldner

オーストリアでは、自然保護と観光は密接に関係しており、イーゼルトレイルは、持続可能性への取り組みを象徴しています。この並外れたハイキングコースを造ったことで、氷河を水源とする川や、その他の自然環境に対する一般の人々の認識と理解を深めることができます。イーゼルトレイルを辿り、手つかずの自然の力や美しさ、そしてそれが極めて重要だと理解した人は、自分の個人的な生活の中で環境に優しくなり、自分自身も環境保全の擁護者になると思うようになるかも知れません。

このハイキングコースは、訪れる人々を刺激するだけではなく、地元住民の持続可能な仕事を確保し、ガイドやレンジャー、山小屋、ホテル、その他のルート沿いの施設の接客スタッフの需要を高めています。

科学研究のための、より簡単な生態系モニタリングから、さらなる保護と環境にやさしい政策の開発のための資金の増加まで、イーゼルトレイルがそれを取り巻く自然に利益をもたらす可能性は否定できません。

イーゼルトレイル

東チロルのイーゼル川に沿って、河口があるリエンツからウムバルケース氷河にある源流まで、川の全行程73.5kmを5段階に分け、5日間かけてハイキングできる長距離ハイキングコース。日当たりの良い谷、絵のように美し



FOTO © TVB Ötztal/ Matthias Schickhöfer



い村々、おどろき話に出てくるような森、息を呑むスリリングな滝、さらには北極のような氷河の世界を体験することができます。イーゼルトレイルの際立った特徴は、「簡単な」ハイキングを提供するように設計されているのではなく、人の手つかずの自然のままを体験できるようにしていることです。特に、最初の3つのステージは、家族連れや初心者に適しています。また、途中で可愛らしい村の1つで休憩して、土地と地元の人々について知ることができます。イーゼルトレイルを歩くのに最適な時期は5月から9月です。詳しくは観光局のウェブサイトをご覧ください。

東チロル

穏やかな気候で休暇に最適な地域で、中心地はリエンツ。ザルツブルク州、ケルンテン州とともにオーストリアの最高峰グロースグロックナーを近くに望み、ホーエ・タウエルン国立公園を共有しています。国立公園の総面積1787km²のうち、610km²が東チロルに属しています。

東チロルへのアクセスは、北側からは、キッツビュールから美しいフェルバータウエルンとイーゼルタール渓谷を通る車・バスのルートと、東側からは、ケルンテン州方面から列車でリエンツに来ることができます。ウィーンからもリエンツへ直通列車(約5時間40分)があります。

オーストリアの 冬の伝統

アドヴェント（待降節）とクリスマスは1年のうちで最も美しく、心ときめく季節です。クリスマスマーケットと手作りのクッキーの香りがお祭り気分を盛り上げ、『きよしこの夜』と共に聖夜がやってきます。



オーストリアのクリスマス

アドヴェント（待降節）はクリスマス前の4週間の期間のことで、オーストリアでは1年で最も平和な時期としても知られています。クッキーを焼いたり、クリスマスのデコレーションを楽しんだり、アドヴェントの歌を合唱したりと、クリスマスまでの数週間、家族で愛すべき伝統を共有し、昔ながらの風習が守られている時期です。

待降節にはアドヴェントリースを用意するのですが、田舎では祖父母が自分の手で作っています。モミの小枝を縛って輪にし、紫や金色のリボンで結び、4本のローソクを立てて、テーブルの上に置いたり、スタンドに掛けたりします。待降節の最初の日曜に1本目のローソクに火をともし、2週間目には2本、3週間目には3本、最後のクリスマスの週には4本すべてに火が点されます。子供たちの興奮と期待はローソクの数とともに高まっていきます。クリスマスの1か月ほど前から、各地の主要な広場ではクリスマスツリーとイルミネーシ

ョンで飾られたクリスマスマーケットが開かれます。人々は、ここでクリスマスのプレゼントを探したり、家でクリスマスの前に飾るクリスマスツリーのオーナメントを買ったりします。もちろん、市の屋台には温かいパンチや、グリューワイン、ソーセージやスナックなど美味しいものもいっぱいです。

そして、いよいよ大人も子供も嬉しいクリスマスイブです。午後になると、父親は子供を誘って外出し、色々な町のイベントに出かけます。その留守に母親たちはクリスマスツリーに飾り付けし、最後にローソクを吊し、プレゼントをツリーの下に並べます。

子供たちが帰ってくるとイブの夕食が始まります。普段は口にするこくない鯉や七面鳥が食卓に並び、デザートは子供たちも手伝って焼き上げたクリスマスクッキーです。

食後、父親はそっと席を立ててツリーのある部屋に。ローソクに火を点し、電気を消して、いま「クリストキント（幼子キリスト）」が帰ったことを知らせます。オーストリアでは、プレゼントを持ってくるのはサンタクロースではなく、このクリストキントなのです。一家揃っ

FOTO © Graz Tourismus/ Tom Lamm



クランプスは地獄からくる鬼で、身体は毛に覆われ、頭には大きな角があり、長い赤い舌、尾っぽ、馬のような足が特徴です。彼は、鞭と鎖を持ち、その鎖で大きな音をたてながら、子供たちを怖がらせ、二度と悪いことをしないと約束させます。街をたくさんのクランプスが脅かしながら暴れる姿には、子供たちばかりか大人たちも震え上がります。しかし、そのあとは聖ニコラウスがやさしく子供たちを笑顔で包み込みます。オ

バーエステライヒ州、チロル州、ザルツブルク州の「きよしこの夜」の村では、この伝統を12月6日に祝います。

てクリスマスキャロル「きよしこの夜」を歌うなか、それぞれにプレゼントが配られ、イブのクライマックスを迎えます。疲れてうとうと眠りについた小さな子は床につけ、大人や大きな子供たちは、深夜のクリスマス・ミサに出かけます。25日は、キリストの生誕を祝うために教会へ行き、午後は親戚や親しい友人宅を訪ねたり、一家でのんびりと団らんを楽しむのが、オーストリアのクリスマスです。

オーストリアの荒々しい冬の風習

12月6日の聖ニコラウスの日の前夜5日に行われる伝統行事に、聖ニコラウスとクランプスの祭りがあります。大きな音を立てて練り広げられるクランプスの祭りには、日本のナマケにも共通する鬼たちが登場します。寒さの厳しいアルプス地方では文明の利器がなかった時代には冬をどう乗り越えるかは死活問題でもあり、冬の悪魔を追い払うなど、生活の中で様々な行事が生まれました。宗教的なつながりはないものの、子供たちにとってはクリスマスへのステップとなります。

聖ニコラウスは鬼のクランプスと一緒に、各家庭を訪ね、良い子たちに小さなプレゼントを持ってきます。また、悪い子にはクランプスに任せて罰を与えてもらうのです。ニコラウスは白い髭を伸ばしたやさしいおじいさんで、司教のように金色の帽子をかぶり、白い服を身にまとっています。彼は最初に金色の本を開き、子供たちの一年間の行いを調べ、その良し悪しによってプレゼントを配ります。

FOTO © Graz Tourismus/ Fischer, Harry Schiffer



芸術家のリビングルーム ウィーンのカフェ文化

今でもウィーンのカフェは出会いの場所であり、議論の場であり、一杯のコーヒーを飲みながら素敵な相手との時間を楽しむ最適な空間です。



ジークムント・フロイトも、アンディ・ウォーホルも、クリムトも。みんな数え切れないほどの時間をウィーンのカフェで過ごしました。その理由を理解するのは簡単です。カフェを訪れるのは日常の決まりごとのようなもので、そこに集う仲間たちは独特の雰囲気を作り上げてきたのです。

言い伝えによると、1683年、包圍攻撃に失敗したトルコ軍が撤退した時に、大量に残されていたコーヒー豆の入った袋を、ウィーンの人々は戦利品として手に入れました。スパイとして宮廷に雇われていたイスタンブール生まれの人物がその豆を利用して、1685年にウィーンにカフェを初めて開業し、真のコーヒーの味を市民に伝えたのがウィーンのカフェ文化の始まりだと言われています。それから340年近くの時が流れ、今やカフェは世界に類を見ないコーヒーを楽しむ公共の場となりました。ウィーンの人々はコーヒーを愛飲する習慣を文化にまで発展させ、生活に不可欠なものとして昇華させたのです。19世紀末には芸術家やジャーナリストたちの社交場となり、クリムトやシーレなどの新

進気鋭のアーティストが芸術談義を交わすサロンでもありました。当時のアパートの部屋は狭く、寒く、暗いものでした。そのために、そこで暮らしていた小説家、画家、音楽家や知識人とパトロンたちはカフェに集まり、会話やゲームを楽しみ、仕事や読書をし、またここで議論や商談もしました。カフェには無料で読める地元紙や外国紙が各種置いてあるので、誰でも新しい情報が得られる場所として、すぐに人々の間で定着しました。作曲家たちもまたカフェの魅力を発見していました。ヨハン・シュトラウス親子はカフェで新曲を発表し、モーツァルトやベートーヴェンさえもカフェで演奏していました。

1900年代、作家の団が、カフェ文学者として歴史にその名を残しました。彼らはカフェを集会の場としてだけではなく、仕事場としても利用していたのです。そのグループの中の一人が、ペーター・アルテンベルクでした。彼は自分の名刺に住所として行きつけのカフェのアドレスを印刷していました。カフェ・ツェントラルはそのお返しに、彼のモニュメントを設けました。

FOTO © Österreich Werbung / Harald Eisenberger

クリムト、ココシュカ、シーレ、ロース、ウグナーなどの芸術家たちは、カフェ・ムゼウムでよく見かけられました。オーストリア応用美術大学の角を曲がった所にあるこの素晴らしいカフェは、ヨーゼフ・ホフマンの教え子のヨーゼフ・ツォッティによって設計された店で、内部はリビングルームの雰囲気を出すために半円形のブース席のデザインとなっています。2010年の大改装によってオリジナルのすばらしい内装デザインに戻されました。

ウィーンのカフェは、リビングルームの延長のような所で、自分の家とは言えないまでも、決して外ではない場所なのです。人々の中にあっても、1人になりたい人にとっては理想的な場所です。カフェに一步入ると、広々として親しみやすい雰囲気の店内では、大理石のテーブルを取り囲むビロード張りのシート、伝統的な木製の「トーネット」の椅子が寄木細工の床を擦る音や、柔らかなで温かみのある光を反射する鏡など、すべてのものが優しく包み込んでくれます。カフェの中には、時の流れに磨かれて黒ずんだ本物の調度類の名品に囲まれた、独特の重厚な趣を醸し出している店もあります。



FOTO © Österreich Werbung / Harald Eisenberger



コーヒーも種類が多く、20種以上のメニューを揃える店もあります。定番は、エスプレッソと温かいミルクを1対1の割合で入れ、泡立てたミルクをのせた「メランジェ」で、いわゆるカフェラテのウィーンバージョン。日本でもおなじみの「ウィーン発祥のコーヒー」を指すウィナーコーヒーは、本場では「アインシュペナー」と呼ばれています。ダブルのエスプレッソにたっぷりのホイップクリームがのっけていて、グラスでサーブされるのが特徴です。

ウィーンのカフェの特にいいところは、そのサービスにあります。営業時間一つをとってみても、早朝から夜中まで開店しているのも印象的です。そしてもちろん、給仕係である「ヘア・オーバー」と呼ばれるウェーターは、注文時の迅速な対応と共に、気さくな会話とウィーン子の魅力でもてなしてくれます。そして、忘れてならないのが素敵な席と、美味しい軽食やスイーツなど、心地よくカフェで長居が楽しめる豊富なメニューでしょう。その日のお勧めメニューのほかにも、昔ながらの定番料理には、ソーセージのマスタード添え、オープン・サンドイッチなどがあり、朝食と朝刊の組み合わせなどは、もはや伝説的な注文メニューとなっています。

オーストリアではウィーン以外にも、各都市でお勧めのカフェがたくさんあります。ザルツブルクでは典型的なカフェの雰囲気に浸れるカフェ・トマセツリ、カフェ・バザールなどが人気です。オーストリアの街々で素敵なカフェ巡りをお楽しみください。

オーストリアの自然で リフレッシュ

新鮮な土の匂い、豊かな緑、静寂の中で過ごす時間。
森で過ごす時間は、私たちの心と体を落ち着かせ、
気分をリフレッシュする効果をもたらします。
一体何が私たちを自然に引き寄せるのでしょうか？



自然の中で時を過ごすことにより、私たちの気持ちは落ちつき、新しい視点が見つけられるようになります。森や牧草地、湖やうねる丘陵など美しく連なるオーストリアの自然景観には、人の心に作用する不思議な力があります。オーストリアには旅人の心のバランスを回復させてくれるすばらしい自然がたくさんあるのです。

特にオーストリアの森で過ごす時間は、私たちの心と体を落ち着かせ、気分をリフレッシュする効果をもたらします。一体何が私たちを自然に引き寄せるのでしょうか？科学的研究により、森林の空気には人体にプラスの影響を与える植物性物質が含まれていることが分かりました。日本では、森の中で意識を集中させた時間を過ごす「森林浴」は、効果が認められたセラピー方法の一つになっています。また、森で過ごす時間は、細胞の有害な変化から体を保護する、いわゆる「キラー細胞」を50パーセント増加させる可能性があることも示されています。ストレスホルモンの減少、免疫システムの強化、血圧の低下、副交感神経系の強化など、目に見える身

体的メリットが得られるとされています。それ故、苔やシダ、ハーブの間を歩き、鳥のさえずり、木の梢に囲まれて過ごす森林浴が、オーストリアでも日本でも、大変人気があるのは当然のことです。

木材の専門家であるエルヴィン・トーマは、「人間は今でも石器時代と同じソフトウェアで動いています。これにより、私たちの体が危険な状況に合わせて0から100まで、無から完璧な状態になるまで対処できるようになっています。これが、脳の脳辺縁系の目的です。これは完全に無意識のうちに機能します。それが、自然の中で時間を過ごすことがとても爽快に感じる理由です。私たちの潜在意識は自然を深いリラクゼーションの源として認識しています。」
トーマはかつてザルツブルク近郊の森林管理者でした。現在は木造家屋の製造会社を経営しています。彼はまた、森林と木造建築が人間に与える影響について複数の本を書いています。



「大都市に住んでいると、生態系を混乱させる光害や騒音から距離を置く機会がないことがよくあります」と彼は言います。自然の中、特に森の中でリラックスすることは、きれいな空気と静けさを得るための解決策です。「しかし何よりも、木々が生化学物質を相互に交換することが、私たち人間にとって真の万能薬となっています」とトーマは言います。木は「テルペン」と呼ばれる生態物質を放出して、害虫、菌類、バクテリアから身を守り、私たち人間は呼吸や皮膚を通じてテルペンを吸収します。テルペンはリラクゼーションをさせる効果や血圧を下げる働きがあり、森を愛する人なら誰でも、その効果によって得られるリラクゼーションや活力に満ちた深い幸福感の事をよく知っています。

ブレゲンツの森

ボーデン湖とフォアアールベルク峠の間に広がる「ブレゲンツの森地方」をご紹介します。フォアアールベルク州の州都ブレゲンツとブレゲンツの森地方は、他に類を見ないすばらしい文化圏です。そこにある豊かな自然は、優れた芸術や文化を生み出すひらめきの源であり、その営みは何世紀にもわたって続いています。ブレゲンツの森は四季を通じて、ファミリーや文化愛好者、ワンデルング・ファン、スポーツ愛好家など、全ての人々に、多彩なプログラムを提供しています。とりわけ大都会の喧噪を嫌い、美しい自然と静けさを求める人々にとって、理想的な環境を提供しています。サマーシーズンには、ブレゲンツの森を行く2000kmに上る表示付きハイキング・ルート、多くのゴルフ場、酪農施設を備えた数々のアルム放牧地が人気を集め、冬にはスベクトルな数多くのスキー場が、白銀の世界へと誘います。

多種多様なチーズとチーズ料理がグルメを魅了し、ヘルシーバカンスのためには、小規模ながら行き届いたウェルネス・ホテルがオープンしています。エキゾチックなアロマセラピーから伝統のツイルベン（しもふり松）サウナまで、あらゆるレパートリーが揃っています。州都のブレゲンツは、ボーデン湖のほとりにある文化都市で、ドイツ、リヒテンシュタイン、スイス、オーストリアの一部で構成される国際的な地域にあります。ボーデン湖畔で夏に行われる「ブレゲンツ音楽祭」は、世界中の音楽ファンから支持されています。また、フォアアールベルク州の木造建築は、ヨーロッパでも独自の建築スタイルとして定着し、一つのブランドとなっています。フォアアールベルク州の建築家は、スウェーデンの建築文化からインスピレーションを得ており、理想的な形の木材と革新的な建築プラン、無傷のまま残る自然、現代建築、建築芸術、環境への配慮を結び付けました。「フォアアールベルク州の建築家の下で研修を行うのは、有名な一流料理人の下で修業をするのと同じくらい価値がある」と言われているのも伊達ではないでしょう。



芸術の国 オーストリア

オーストリアは長い歴史を通じて音楽と美術の保護を旗印に掲げ、他国ではほとんど例がないほどの資金と労力を注いできました。



ヨーロッパの中心に位置するオーストリアは、古来より様々な文化が交錯し、豊かな文化と歴史を育んできました。中でも「音楽」は、この国を紹介する上で最も重要な代名詞といえます。世界的に名高いウィーン国立歌劇場、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン少年合唱団、フォルクスオーパーなどは、オーストリアの文化使節としても活躍しています。

オーストリアの音楽史上「ウィーン古典派」は、偉大な文化遺産の一つに数えられます。そのウィーン古典派は、ハイドゥンに始まり、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトが含まれます。ロマン派を代表するのは、ブラームス、ヴォルフ、ブルックナー、マーラーです。ヨハン・シュトラウスとフランツ・レハールはオペレッタの分野で名を馳せ、そして、シュランメル兄弟の音楽は、ウィーンのワイン居酒屋「ホイリゲ」と切っても切れない関係にあります。毎年各地で開催される数多くの音楽祭や芸術祭には、世界中から音楽ファンが集います。最も有名なザルツブルク音楽祭をはじめ、ウ

ィーン芸術週間、ボーデンゼー湖のプレグンツ音楽祭、メルビッシュの湖上音楽祭、グラーツのシュティリアルテ音楽祭、フィラッハ/オシアッハのカリンシア夏の音楽祭、シュペルティアアデ、リンツの国際ブルックナー音楽祭やクラングヴォルケ、そしてグラウフェネック・クラシック音楽祭、サンクト・マルガレーテン採石場野外オペラフェスティバルなど、多彩なプログラムが繰りひろげられます。詳しい情報は20～23ページにも掲載していますので、ご覧ください。また、ウィーンフィルのニューイヤーコンサートとシェーンブルン庭園での夏のコンサートは毎年、世界中に中継/放映され、音楽ファンを楽しませてくれます。

FOTO © Graz Tourismus/ Henry Schiffer

オーストリア/ポケットガイド

オーストリアの美術コレクション

帝国の時代、ハプスブルク家の人々は芸術作品収集に情熱を傾け、幾世紀にわたり世界中から数多くの絵画や美術品の名作が集められました。現在、オーストリア全国にはルーベンスやプリューゲル、ベラスケスなど古典の大家から新進の現代芸術家までの作品を擁する約1000の美術館・博物館があります。特に人気の高い「ユーゲントシュティール」様式を代表するグスタフ・クリムト、エゴン・シーレ、オスカー・ココシユカの絵画は、世界的な名声を博しています。



るテーブルウェアやリネンのお店「シュヴェービッシェ・ユングフラウ」、ユーゲントシュティールの美術工芸品や各種ウィーンプロダクツ商品を展示・販売する「オーストリア工房」、歴史的なデザインによる家具やハイセンスなインテリアを生産する「フリードリヒ＝オットー・シュミット」などがお勧めです。

オーストリアのデザイン

百数十年も前から受け継がれている職人たちの手仕事を現代に再現した「ウィーンプロダクツ」加盟企業の製品をはじめ、オーストリア発のアクセサリーやファッションが世界的に注目されています。特に、豊かな文化遺産と若く活力あるクリエイティブシーンの両面を持つウィーンは、まさにクリエイティブ業界の中心地です。また、全国に渡りカフェやレストラン、ホテルなどでも、オーストリアならではのデザインを感じることができます。

オーストリアならではの逸品

アクセサリーをお求めなら日本でも人気の高い「スワロフスキー」は本場オーストリアのショップを訪れてみてください。ワッテンスの本社に隣接するクリスタルワールドの他、インスブルック、ウィーンやウィーン空港にショップがあります。可愛い小物やアクセサリーの数々がショーウィンドウを飾り、その豪華さはメルヘンの世界そのものです。

伝統的な品物をお求めなら、高級磁器セットの代名詞「アウガルテン」、美しいガラス製品とテーブルウェアでゴージャスな食卓を演出できる「ロプマイヤー」、独自のアトリエを構え

ウィーンでのファッションでは、バラエティー豊かなデザインを取り揃える帽子店「ミュールパウアー」、伝統的な民族衣装とロマンチックな1950年代ファッションに現代的なエレメントを加えた「レナ・ホシエック」、軽やかで時代を超越した独自ブランドを展開する「ピア・ミア」、選抜きの眼鏡やサングラスの数々をコレクションするアイウェアのお店「シャウシャウ・ブリレ」などが人気です。

ウィーンでちょっとした小物をお探しなら、最高級のナチュラルコスメティックスが揃う「セントチャールズ・コスモテカリー」、モダンなデザインのハンドメイド陶器が揃う「モノ・デザイン」、選び抜かれた愛らしい商品の並ぶ雑貨店「アンナ・シュタイン」などはいかがでしょう。

地域の伝統工芸品では、かわいらしい花柄や渦巻き模様のグムンデン陶器、美しい民族衣装のディアンデルや男性用のトラハテン、レーダーホーゼンなどもおすすめです。



FOTO © KHM/Museumsverband © Österreich Werbung/ Christof Wagner

オーストリア/ポケットガイド

オーストリアの 音楽祭／フェスティバル

大規模で有名な音楽祭やフェスティバルは、以前より世界の文化イベントの中で最上位の地位を築き、近隣や遠方の国々から訪れる音楽ファンを魅了しています。



オーストリアには世界レベルの大音楽祭から、地方の小さいフェスティバルまで200以上の音楽祭があります。その多くは地域をあげてワクワクするような祭り気分の雰囲気の中で開催されます。美味しい郷土料理も見逃せない文化体験です。また、ジャズやダンス、パフォーマンスフェスティバルなどは、年を重ねるごとにそれぞれ特徴を形作り、文化イベントに欠かせないものとなっています。以下に、オーストリア全国の主な音楽祭とフェスティバルをご紹介します。

モーツァルト週間

1956年以来、モーツァルトの誕生日である1月27日を挟んで、モーツァルト週間は生誕地ザルツブルクで開催されています。

この音楽祭は国際モーツァルト財団が主催するもので、世界的に有名なモーツァルトの名演奏家やウィーンフィルやモーツァルト管弦楽団などのオーケストラが、祝祭劇場、モーツァルト大ホール、モーツァルト

の住居などの会場でモーツァルトを中心に、他の作曲家の作品にもスポットライトを当て素晴らしい演奏を行っています。

開催：1月～2月

ザルツブルク・イースター音楽祭

1967年ヘルベルト・フォン・カラヤンにより創設された復活祭に行われる音楽祭で、45年間ベルリンフィルが演奏していました。2013年からはクリスティアン・ティーレマンとザクセン・シュターツカペレ・ドレスデンが新たな時代を切り開いてきました。

音楽祭のプログラムは一流のオペラ、オーケストラコンサート、合唱曲、室内楽、高い芸術性をもつ若者のためのプロジェクトからなっています。

開催：4月

ウィーン芸術週間

ステージの上だけではなく市全体が舞台となり、全く異なる音楽を視聴覚化することがウィーン芸術週間の目的です。その豊かな芸術性で、国際的なアーティストたちのジョイント・プロジェクトや、オペラ、舞台劇、コンサート、パフォーマンスアート、展覧会など幅広いジャンルを強調した革新的なイベントによって、ウィーン芸術週間は60年間の経験で世界のフェスティバル・シーンで重要な地位を築き上げました。

開催：5月～6月

レハール音楽祭

オペレッタの一時代を築き上げた作曲家フランツ・レハールは、風光明媚なザルツカンマーグートの中心地バート・イッシュルに別荘を持つ名誉市民でもありました。1961年に設立されたバート・イッシュル・オペレッタフェスティバルは2004年にレハール音楽祭という新たな名前になり、国際フェスティバルのカレンダーの一部になりました。会場はクアハウス。

開催：7月～8月

ライディングのリスト音楽祭

神童、ピアノの名手、プレイボーイであり聖職者。自称「放浪の音楽家」であったフランツ・リストは1811年に、ブルゲンランド州のライディング村で生まれました。リストの生家は現在、博物館となっています。

生家のすぐ隣にあるリスト・コンサートホールは、ブルゲンランド州の建築賞を受賞した建物で、600席が設けられています。

開催：3月、6月、10月



ザルツブルク音楽祭

ザルツブルク音楽祭は1920年、荒廃したヨーロッパの人々を和解させることを目的とした平和プロジェクトとして、マックス・ラインハルト、リヒャルト・シュトラウスらによって創設され、すでに創立100年を迎えています。ホフマンスタールの言葉を借りれば、ザルツブルク音楽祭はオペラと演劇の両方を、最高の状態で上演するために設立されました。今日、ザルツブルク音楽祭は世界で最も有名なフェスティバルです。

開催：7月～8月

ザールフェルデン・ジャズフェスティバル

ザルツブルク州の風光明媚なザールフェルデンで、40年以上にわたり毎年開催される国際ジャズフェスティバル。コンGRESセンターを始め、市庁舎前広場から周辺の高原や山がステージとなります。

開催：8月



シュティリアルテ音楽祭

グラーツで毎年夏に開催されるシュティリアルテ音楽祭は、2016年に亡くなったニコラウス・アーノンクールが30年間にわたり主催してきた音楽の歴史を刻む音楽祭です。ユネスコ世界遺産のグラーツ歴史地区の様々な場所、エッゲンベルク城などの他、シュタイヤマルク州の小さな町や自然の風景も音楽会場です。ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスの他、シュティリアルテ音楽祭管弦楽団に加え、フェスティバルのレギュラーゲストには初期古典音楽のスターたちが出演します。オープニングコンサートはグラーツ市民公園にて野外で開催され、入場無料です。
開催：6月～7月

「カリシニアの夏」音楽祭

この音楽祭の目的は、様式化された音楽のレパートリーの制約を打破することにあります。ゴットフリート・フォン・アイネム、アルヴォ・ベルト、ズービン・メータ、リカルド・ムーティやギドン・クレーメルなどが、フェスティバルに深く関わってきました。上演会場は、バロック期の素晴らしい装飾を持つオシアッハ修道院、アルバン・ベルク・ホール、音楽祭の第二の故郷であるフィラッハの会議センター、クラウゲンフルトの大聖堂、ギュンター・ドメニクのアヴァン・ギヤルドなシュタインハウス、近郊の城館や教会など、多様なステージが用意されています。
開催：7月～8月

インスブルック古楽器音楽祭

ルネッサンスとバロックの時代、インスブルックはヨーロッパの重要な音楽の中心地でした。現存する初期古典音楽の最古のフェスティバルであるインスブルック古楽器音楽祭は、その伝統を受け継いでいます。1976年以来ずっと、古典音楽界で最も著名なアーティストたちを招いています。会期中はミュージシャンたちの奏でる陽気な音楽が街の広場に溢れ、インスブルックの歴史的な会場すべてが、華麗なオペラ作品や有名なアンサンブルの演奏の舞台となります。
開催：8月

メルビッシュ湖上音楽祭

ユネスコ世界遺産であるノイジードラーゼーの湖上舞台で夏の夜に繰り上げられる楽しいオペレッタの音楽祭。メルビッシュ湖上音楽祭では毎夏、オペレッタやミュージカルの傑作が次々に上演されています。音楽祭の会場は、ヨーロッパで最大かつ最も美しいオープンエアのステージの一つで、国立公園の印象的な自然の風景によく調和しています。有名な演奏家たちによるオペレッタやミュージカルの楽しく美しいメロディーは、世界中から訪れる観客を日常生活から遠く離れた魔法の世界へと導いてくれます。
開催：7月～8月

ブレゲンツ音楽祭

毎年夏の4週間、ブレゲンツの観衆は広々とした空の下、これまで体験したことのない強烈な印象の中で、不朽のオペラを鑑賞することになります。このオペラの夕べは、指揮者が指揮棒を振る何時間も前、観客たちが水に浮く湖上ステージに船に乗って集まってくる時点から始まります。このパフォーマンスも見せ場の一部となっているのです。湖上ステージの他、祝祭ホールでのオペラ上演、オーケストラのコンサートや劇団のゲスト出演、ワークショップ劇場、祝祭ホールやブレゲンツ・クンストハウスでの現代作品や、その他の会場で数多く行われる若者の「クロスカルチャー」のシリーズの一部となっているイベントが音楽祭を完結させます。
開催：7月～8月

サント・マルガレーテン

野外オペラと受難劇

サント・マルガレーテンでは二千年もの間、ヨーロッパ最大の採石場として砂岩が切り出され、奇妙な岩の風景が造られました。これにより、巨大なオペラのステージセットが生まれ、1996年に、オリエンタル風の地形の景色を背景幕として、ヴェルディ作「ナブッコ」が初演のオペラとして上演されました。一流の歌手を出演者に迎えて、人気オペラ作品が上演されるフェスティバルには、今では毎年2万人を超すオペラファンが集まります。また、5年毎に行われる受難劇は、この古代ローマの採石場のオペラストージで上演されます。
開催：7月～8月

グラウフェネック音楽祭

食の楽しみ、歴史的な城と広大な風景庭園、世界に誇るコンサート・プログラムのすべてが組み合わさったグラウフェネック音楽祭は、すべての人の感覚を大いに楽しませてくれます。ルドルフ・プッフビントナーが音楽監督を務め、世界の名だたるオーケストラや指揮者、ピアニストやソリストが出演します。素敵な夜を締めくくる最良の方法は、城の敷地内のレストランで名シェフのディナーを楽しむことでしょう。賞を獲得したオーストリア料理と合わせて、近隣のワツハ川渓谷とカンブートル渓谷か、ワインの産地ヴァグラムの日当たりのよい丘陵地で作られたワインも味わってください。
開催：8月～9月

シュヴァルツェンベルクノ

ホーエナムスのシューベルティアーデ

シューベルティアーデは、40年以上の間、フォアアールベルク州で行われる世界最高峰のシューベルト音楽祭です。2005年に改修され再オープンしたマルクス・シティクス・ホールをメイン会場とするホーエナムスと、典型的なブレゲンツの森地方の町シュヴァルツェンベルクが開催地です。青々としたアルプスの緑の牧草地や、広大な森とそれらを取り囲む岩山の環境の中にある、簡素な木造のアンゲリカ・カウフマン・ホールは、オーストリア国内で室内音楽に適した最高のホールの一つであると言われています。
開催：ホーエナムスで5月、6月、7月、10月
シュヴァルツェンベルクで6月、8月

※音楽祭の詳しい日程は、
www.austria.infoをご覧ください。



人生の“愉しみ”を満喫する

オーストリア人は、人生を謳歌することに長けています。ここでは、人生を最高に楽しむために彼らが通う特別な場所を、いくつかご紹介しましょう。



ワイン居酒屋「ホイリゲ」

オーストリアは人生の楽しみ方をよく知っている国です。そして、ホイリゲはまさにオーストリアの温かさと居心地の良さを実感できる場所として、この国の人々にはとても馴染み深いところです。地元の人々はホイリゲに集い、ワイン醸造者が造った自慢の新酒と、美味しい家庭料理、自家製のベーコンやチーズなどに舌鼓を打ちます。テーブルには楽しい会話と笑い声があふれ、時が経つにつれて歌声が店内に響き渡ります。ホイリゲで楽しむ伝統は、少なくとも18世紀まで遡ることができます。それは、時の皇帝ヨーゼフ2世が、いつでも誰でも自家製のワインを販売したり、供したりすることを許可する条例を施行した時代でした。ウィーン郊外のホイリゲ地区、ニーダーエステライヒ州、ブルゲンランド州とシュタイアマルク州のワイン産地にたくさんあります。

山小屋「アルムヒュッテ」

アルプスの牧草地に建つ山小屋は、元々、夏の間山の中腹の牧場で働く牛飼いや酪農従事者の住居でした。その後、山小屋はアルプ

ス文化と人生の喜びを象徴するものとなりました。

よくある板葺きの小屋では、訪れる旅行者やハイカーを親切なオーナーが温かく迎えてくれます。山小屋では、心尽くしの料理とサワー種の黒パンが供され、楽しい会話とアルプス独特の魅力を味わうことができます。山小屋はアルプスのハイキングコースに沿ってあります。フォアアールベルク州、チロル州、ザルツブルク州などオーストリア西部に多く点在します。

地元の人が集まる居酒屋「バイスル」

オーストリアの温かさと居心地の良さを感じる時、3つの場所が挙げられます。それは、カフェとワイン居酒屋、そして昔ながらの居酒屋「バイスル」です。典型的なバイスルの設えは、木製バーカウンターと木製の壁の羽目板、メニューを手書きした黒板を特徴としています。ウィーナー・シュニッツェルやエッグノッケル、古典的な家庭料理がこのバイスルでも味わえます。地元で人気のバイスルは、オーストリア中どこにもあります。

FOTO © Klärten Werbung/Edward Gögler

FOTO © Kipfler Ltd © Burgenland Tourismus GmbH/Brigit Mächtinger



ソーセージスタンド「ヴェルスデルシュタント」

ここは単なる伝統的なスナック・バーではありません。仕事の合間にちょっと立ち寄りて一息入れる大切な場所なのです。ここで、ケーゼクライナー（チーズ入りソーセージ）にマスタードを添え、パンと食べ、ウィットに富んだ、魅力ある店員と会話を楽しみます。当初、ヴェルスデルシュタントは帝国時代に、退役した傷痍軍人たちの生計を立てる仕事を与えるために出現しました。伝説的なケーゼクライナーは、オーストリア人が創作したものです。ソーセージのレシピはスロヴェニアが起源ですが、それをオーストリアの食通が、ソーセージを焼いた時に溶けるチーズを加えて完成させた、手軽で美味しいご馳走なのです。ウィーンのソーセージスタンドが有名ですが、オーストリアのどの主要都市でも見られます。

ケラーガッセ・ワイン祭り

ワインの生産地域の夏のハイライトが、このワイン祭りです。この時期、人々はワインケラー（ワイン貯蔵所）が立ち並ぶ小路をそぞろ歩き、貯蔵所から貯蔵所へと渡り歩いて、それぞれのワイン醸造者が造った素晴らしい新酒と美味しい料理を味わって回ります。それに加えて、何世紀もの歴史を誇る、見渡す限り続くドウ畑の風景は、見る者に活力を与えてくれます。ワイン祭りは、オーストリアのワイン生産地の各地で行われています。特にニーダーエステライヒ州が有名です。

ビアガーデン

夏の暑い夜、人々に愛されている場所の一つが、国中どこにでもあるシャニーガルテン（シャニーとは、オーストリアのニックネームでヨハンの愛称）とも呼ばれるビアガーデンです。仕事の後、オーストリア人はこれらのビアガーデンに立ち寄り、ニフトコの花から作ったホルンダージュースや、ビールで喉の渴きを癒します。店によっては、オリジナルのビールを醸造して提供しています。このような所では、普通の夕べがささやかな祝杯の席へと変わり、ありふれた日常をしばし忘れさせてくれます。ビアガーデンは、ザルツブルクが有名ですがオーストリア中どこにもあります。

カフェ

ウィーンのカフェ文化は、オーストリア人が食通である事を証明する最適の例でしょう。ウィーンではカフェが、ユネスコにより無形文化遺産として認定されたほどです。その歴史は17世紀末まで遡ることができ、トルコ軍によるウィーンへの包囲攻撃と深い関わりがあります。代表的な古典的カフェのインテリアは、小さな大理石のテーブルに、トーネット・デザインの大木製の椅子、ボックス席、新聞ラック、歴史主義的意匠の飾り付けを施した内装を特徴としています。そして、カフェで出される水も、オーストリアのカフェ文化を特徴づけています。また、世界で初めてお客様に新聞を提供したのはウィーンのカフェといわれています。カフェは、オーストリア中どこにもありますが、最も有名なのはやはりウィーンのカフェでしょう。

個性あふれる 9つの州

オーストリアは
個性あふれる9つの連邦州からなる共和国です。
各州にはそれぞれの魅力と特長があります。



ウィーン

オーストリアの首都ウィーンは古い伝統を持つハプスブルク帝国の都、音楽と芸術が輪舞する街。その一方で、近代的で未来を志向する建築物も多く、スタイリッシュなライフスタイルと活気のある文化の愉しみにあふれています。市の周囲には約1350km²にもおよぶ広大なウィーンの森が広がり、市民の憩いの場所となっていて、これは他のヨーロッパの大都市にはみられない独特の魅力です(30ページ参照)。

ブルゲンランド州

オーストリアの東端に位置する州。ここには世界遺産のノイゼードラーゼー湖があり、野鳥の宝庫であるゼーヴィンケル国立公園も隣接しています。ルストなど、コウノトリがコロニーを作る農村やハンガリー風のエキゾチックな町が魅力。オペレッタ・フェスティバルで有名な湖畔の町メルビッシュ、サンクト・マルガレーテンの野外オペラなど音楽イベントも豊富です。また、良質でおいしいワインの産地としても知られています。州都はハイドンとエスターハーザー侯爵家ゆかりの街アイゼンシュタット。

ニーダーエステライヒ州

ウィーンを囲むようにして広がる州。州東側の丘陵地帯は良質のワイン産地になっており、北部は森林におおわれています。バロック様式の修道院が建つメルクとクレムス間のロマンチックなドナウ川の渓谷は「ワウハウ渓谷」と呼ばれ、ユネスコ世界遺産にも登録されており、ニーダーエステライヒ州でいちばん人気のある休暇地となっています。州都はサンクト・ペルテン。

シュタイヤマルク州

森が豊かなことから「緑の州」とも呼ばれており、アルプスの大自然はもちろん、牧歌的な村の風景が美しい地域で、数多くの文化財を見ることができます。スロヴェニア国境の南シュタイヤマルク地域はワインの名産地として有名です。ブッセンシャンクと呼ばれるワイン生産者の直営店が点在しており、ワイン愛好家におすすめのルートです。一方、バート・アウスゼー周辺のザルツカンマーグートのシュタイヤマルク州側の部分は、美しい湖と山の景観によって、南部とは違った魅力を放っています。州都はグラーツ(44ページ参照)。

ケルンテン州

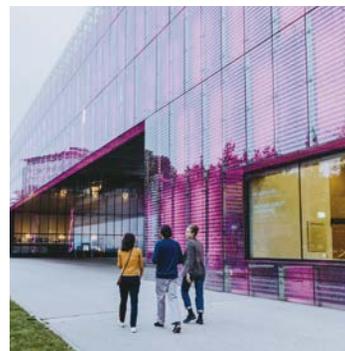
オーストリアの最南部にあるケルンテン州には、ヴェルターゼー湖、オシアッハゼー湖、ミルシュテッターゼー湖など、湖水浴のできる大きな湖があって、水泳や水上スポーツが楽しめるパラダイスとなっています。州の最北端にはオーストリア最高峰のグロースグロックナー山が秀麗な姿を見せています。州都のクラゲンフルトは、バロックとユーゲントシュティールの建物が建ち並び、芸術や文化の薫り高い見どころの多い古都です。

オーバーエステライヒ州

風光明媚な湖水地方ザルツカンマーグートは、オーバーエステライヒ州を中心に広がり、保養休暇を過ごすのに理想的な環境を提供します。皇帝フランツ・ヨーゼフ1世と皇妃「シシィ」はバート・イッシュルで何度も夏を過ごしました。州の北側の森の深いミュールフィアデルの丘陵地帯は、チェコとの国境を形成しており、訪れる人々を惹き付けます。州都のリッツは、音楽家ブルックナーゆかりの街として知られ、モダンなアルスエレクトロニカセンターやレントス美術館など、芸術探訪もおすすです。

ザルツブルク州

ザルツブルク州は、ハイカーや自然愛好家の憧れの場所となっているホーエ・タウエルン国立公園を含むアルプスの山岳地方。ザルツカンマーグートの大自然の美しさは映画『サウンド・オブ・ミュージック』でお馴染みです。ザルツブルクの名前の由来である「岩塩の城」を体験できるハラインの岩塩坑や、「きよこの夜」誕生の地オーベルンドルフ、世界一の水穴があるヴェルフエンなども見どころです。州都はザルツブルク(38ページ参照)。



チロル州

牧歌的な山の景色で知られるチロル州の文化の拠点は、インタール渓谷に数珠つなぎに存在します。インスブルック、ハル、ラッテンベルク、クーフシュタインなどの魅力的な町が点在します。また、ツィラータール、シュトゥーバイタール、エッツタールなどの渓谷、サンクト・アントンやゼーフェルトはハイカーやスキーヤー、そして休養を求める人々の理想郷として有名です。また、東チロルはザルツブルク州をはさんで離れたところに位置する自然の宝庫です。州都はインスブルック(48ページ参照)。

フォアアールベルク州

オーストリアの一番西に位置する州。面積は小さいながらも、シルヴレッタの氷河の世界からライン渓谷の平地にいたる、変化に富んだ自然が特徴です。州都ブレゲンツを有名にしているのが、世界最大のオペラ・フェスティバルの一つ、夏の「ブレゲンツ音楽祭」。個性的な湖上ステージは映画007のロケでも使われました。スキーやハイキングが盛んなアールベルク地方の村レヒは、世界のセレブが休暇を過ごす高級リゾート地で「ヨーロッパで最も美しい村」に選ばれました。

Google マップに「オーストリアのオススメ」リスト



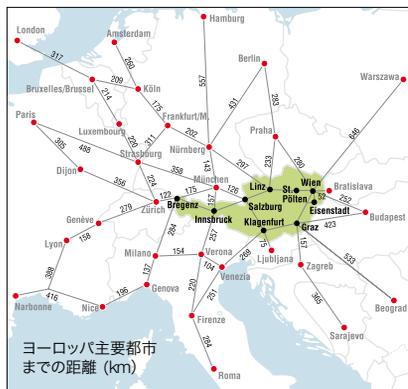
オーストリア政府観光局では、地図アプリ「Google マップ」でオーストリアと、日本国内のオーストリア関連のオススメ場所を集めたリストを作成しました。気に入った場所は「自分のリスト」に保存できます。情報がリアルタイムで更新されるので、現地での経路検索や、観光施設・飲食店などの営業状況の確認もできます。

オーストリア地図 位置と距離

オーストリアは中央ヨーロッパの南部に位置し、国土の総面積は83,858平方キロメートル、人口は約890万人。公用語はドイツ語ですが、英語もよく通じます。



- アウトバーン
- - - - - 建設中のアウトバーン
- 高速道路
- - - - - 建設中の高速道路
- 幹線道路
- 主要道路
- その他道路
- 鉄道
- ✈ 国際空港
- 国境
- 州境



MAP © Ed. Hölzel, Wien

9つの州と州都



州都間の距離

(km)	ブレゲンツ	アイゼンシュタット	グラーツ	インスブルック	ラーゲンブルク	リンツ	ザルツブルク	ザルト・ルンデン	ウィーン
ブレゲンツ	—	769	700	187	575	547	429	656	720
アイゼンシュタット	769	—	183	582	307	232	347	113	65
グラーツ	700	183	—	513	133	215	255	190	210
インスブルック	187	582	513	—	377	360	242	469	533
ラーゲンブルク	575	307	133	377	—	257	212	339	335
リンツ	547	232	215	360	257	—	118	121	185
ザルツブルク	429	347	255	242	212	118	—	230	294
ザルト・ルンデン	656	113	190	469	339	121	230	—	65
ウィーン	720	65	210	533	335	185	294	65	—

ウィーンの見どころ

誰もが憧れる音楽と芸術の都ウィーン。
古くよりヨーロッパの東西と南部を結ぶ十字路として栄え、
いまも宮廷文化が華麗に息づきます。



古くよりヨーロッパの東西と南部を結ぶ十字路として、ウィーンは二千年の歴史に育まれてきました。ハプスブルク家が育んだ音楽と芸術の都として知られ、ハプスブルク帝国の重要な歴史的建築が見どころですが、最近ではモダンな現代建築、最新のデザインやファッションの発信地としても知られるようになりました。

シュテファン大聖堂 鮮やかな屋根が街並に花を添えるウィーンのシンボル。南北2つの塔からはウィーンの街が一望にでき、石造りの説教壇や祭壇を彩る絵画など幻想的な内部装飾は必見です。カタコンベ(地下墓地)には歴代皇帝の臓器が安置されています。

[MAP] P.35 B-3

シェーンブルン宮殿 ユネスコ世界遺産に指定されたハプスブルク家の夏の宮殿。マリア・テレジア・イエローで彩られた外観が印象的。ロココ様式で統一された内部には、1400余りの部屋があり、そのうち40室が公開されています。ウィーン会議の際に舞踏会場として使用された大広間、6歳のモーツァルトが御前演奏した鏡の間は必見です。宮殿の後方に広がる庭園は面積1.7km²。シェーンブルン(美しい泉)の名前の由来となった泉、1752年から始まった現存する世界最古の動物園、大温室パルメンハウス、ネプチューンの噴水、迷路庭園、日本庭園があります。ギリシア風の神殿グロリエッタの中にはカフェがあり、また、宮殿に隣接する馬車博物館には歴代の皇帝たちが使用した豪華な馬車が展示されています。

www.schoenbrunn.at

FOTO © Österreich Werbung / Daniel Orselt

FOTO © Österreich Werbung / Julius Silver



ベルヴェデーレ宮殿 バロック宮殿の最高傑作に数えられるベルヴェデーレ宮殿は、ヨハン・ルーカス・フォン・ヒルデブラントが設計。対トルコ戦争の時代、ハプスブルク軍の総司令官であったサヴォイ家のオイゲン公(1663~1736)が夏の離宮としていました。式典用の上宮と居住用の下宮からなり、その間には緩やかに傾斜したバロック庭園があります。上宮のオーストリア・ギャラリーには、クリムト、シーレなどクーゲントシュティール、ピーター・マイヤー、歴史主義などの名画が多く、下宮にはバロック美術の名作が展示されています。

[MAP] P.35 D-3,4 www.belvedere.at

リング通り 19世紀の中頃、ウィーンの旧市街を取り囲んでいた城壁を皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の命により取り壊し、現在の幅広い環状道路が作られました。この通りに沿って、公園、国会議事堂、市庁舎、大学、ブルク劇場、国立歌劇場、美術史/自然史博物館、王宮などが、まるで建築図鑑のように立ち並んでいます。

[MAP] P.34,35 A,B,C-2,3,4

公園と庭園 市立公園(シュタットパーク)は、1862年にウィーン市立第一号の公園としてオープンしました。園内には有名なヨハン・シュトラウスの記念像やシューベルト、ブルクナー像があり、クアサロンではコンサート&ディナーが楽しめます。

[MAP] P.35 C-3,4

市民庭園(フォルクスガルテン)は、美しいバラ園が見どころで、伝説的の皇妃シィの記念碑がシンボルです。

[MAP] P.34 B-2

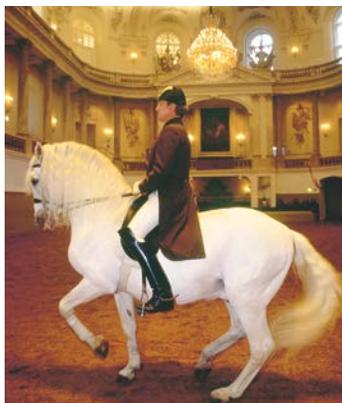
王宮庭園(ブルクガルテン)は、有名なモーツァルト記念碑がある英国様式の庭園です。皇帝フランツ・ヨーゼフ1世のプライベートな庭園でしたが、死後3年たった1919年に一般に開放されました。ここにはフリードリヒ・オーマン設計の世紀末様式の美しい温室(パルメンハウス)があります。温室内には蝶の家があり、何百ものエキゾチックな南国の蝶が飛び交います。エレガントな雰囲気のカフェ・レストランも営業しています。

[MAP] P.34 C-2

ホーフブルク王宮 ハプスブルク家の皇族たちが住居として使用していた居城。帝国の発展に伴い増改築が繰り返され、各時代の建築様式が共存する建物となっています。旧王宮ではシィ博物館と皇帝の住居を公開しています。銀器コレクションも見事です。新王宮にはウィーン世界博物館があり、日本の展示もあります。また、隣接する王宮庭園には有名なモーツァルト像があり、絶好の写真スポットとなっています。

王宮宝物館では、ハプスブルク家の栄光を伝える財宝と、教会の財宝の数々を集めた類い希なコレクション展示されています。聖遺物の数々、ミサに用いられる豪華な祭服や祭具のほか、10世紀に制作された神聖ローマ帝国の帝冠と権標、オーストリア皇帝の冠、ブルグント公国の財宝、金羊毛皮騎士団の財宝などが展示されています。

[MAP] P.34 C-2 www.hofburg-wien.at



スペイン式宮廷馬術学校 世界で最も美しいバロック様式の乗馬ホールは、巨匠フィッシャー・フォン・エルラッハの設計によるもので、皇帝カール6世時代の1729～35年に建てられました。16世紀から17世紀にかけて世界帝国を築いたハプスブルク家は、オーストリア・ハプスブルク家とスペイン・ハプスブルク家に分かれ、1700年にスペイン・ハプスブルク家が断絶するまで、イベリア半島から多くのアンダルシア馬が導入され、今日のリピッター種が確立されました。「スペイン」の名はこの史実に由来します。厩舎(シュタールブルク)にはリピッター博物館があります。

MAP P.34 C-2 www.srs.at

市庁舎(ラートハウス) 1872年から1883年にかけて造られたネオゴシック様式の建築。手前の市庁舎前広場は各種イベント会場となります。夏には音楽フィルムフェスティバル、11月中旬～12月26日はクリスマスマーケットが開催され、11～3月はスケートリンクが設置されます。

MAP P.34 B-2

ケルトナー通り シュテファン大聖堂から南に延び、国立歌劇場まで続く最も賑やかな歩行者専用の大通り。高級店から人気ブランド店、カフェが並び、いつも街頭ミュージシャンが活躍しています。

MAP P.35 C-3

ウィーン国立歌劇場 1861年から1869年にかけて宮廷オペラ劇場として建てられました。1945年に戦災を受けましたが修復され、1955年カール・ベームの指揮するベートーヴェンの『フィデルリオ』で再開されました。館内のガイドツアーがあります。

MAP P.35 C-3

www.wiener-staatsoper.at

美術史博物館 ハプスブルク家が収集した約40万点の美術品を所蔵。絵画ギャラリーのコレクションはルーベンス、レンブラント、デューラー、ティツィアーノ、ペラスケスと広範にわたり、中でもブリュゲルのコレクションは豊富で、「農民の婚礼」を始め主要作品のほとんどがここに展示されています。また、クンストカンマー(美術工芸館)では2200点もの魅力的な美術作品が鑑賞でき、木曜の夜は館内でディナーを楽しむことができます。

MAP P.34 C-2 www.khm.at

自然史博物館 先史時代からの動物、植物、鉱物やハルシュタット文化時代の出土品、約2万5千年前の「ヴィレンドルフのヴィーナス」像、マリア・テレジアの「宝石の花束」などが有名です。

MAP P.34 C-2

プラーター ドナウ運河とドナウ本流の間に広がるプラーターは、遊園地、スポーツ施設、緑地をもつウィーン市民老若男女の憩いの場所です。大人にも子どもにも人気の高い大観覧車やミニ列車をお楽しみください。

MAP P.35 A-4

ドナウ運河 シュヴェーデンプラッツにはドナウ定期観光船発着場やカフェ、レストランがあります。夏季の土曜日には運河沿いに美術骨董品の露店市がたちます。ドナウ本流はここより東約3kmのところにあります。

MAP P.35 A-3, B-3, C-4

マリアヒルファー通り ウィーンっ子に一番人気の約2km(ミュージアム通り/ゲトライデマルクト～西駅間)のショッピング街。ウィーンでは数少ない日本式デパートもあります。地下鉄U3。

MAP P.34 D-1, C-2

世紀末を駆け抜けた クリムトとシーレ

クリムトの代表作『接吻』はベルヴェデーレ宮殿、シーレの作品は、主にウィーンのレオポルド美術館で見ることができます。



19世紀末に興ったヨーロッパの芸術文化を指すアール・ヌーヴォーは、オーストリアでは「ユグtentシユティール」と呼ばれています。「時代にはその芸術を。芸術には自由を」をモットーに、19世紀末のウィーンにはグスタフ・クリムトを筆頭に、エゴン・シーレ、オットー・ワグナーほか偉大な芸術家たちが登場しました。

オーストリアを代表する画家グスタフ・クリムトは、1880年代初頭、弟のエルンストと友人フランツ・マツチュの3人で芸術家商会「キュンストラークンパニー」を設立し、オーストリア＝ハンガリー帝国全土にわたる数多くの建物の壁画と天井画の制作を委託されます。その後、保守的な美術家協会を脱退し、「セセッション(分離派)」の名のもとに、新しい芸術家グループを結成。また、才能溢れる若き芸術家たちの後援者として確固たる地位を築きます。

いままクリムトが手掛けた歴史主義時代の壁画は、ブルク劇場や美術史博物館の階段ホールなどで見ることができます。代表作の絵画『接吻』や『死と生』、分離派会館の壁画『ベートーヴェン・フリース』は世界中の人々に親しまれています。

一方、エゴン・シーレは学校時代から授業中にいつも絵ばかり描いていて、決して成績の良い生徒ではありませんでした。しかし、美術教師だけは彼の才能を認め、造形美術アカデミーに進学できるように力を貸し、16歳のとき入学が認められました。

ウィーンでシーレはグスタフ・クリムトと知り合い、次第にクリムトの影響を大きく受けることとなります。その後、わずか2年でシーレは超保守的なアカデミーを去り、芸術的功績を模索するため、友人たちと「新たな芸術団」を結成し、リーダーを務めました。シーレは常に良い友人や後援者に恵まれ、仕事の依頼も多く得ていました。一般的にはシーレの画は前衛的でユニークで、挑戦的だと評価されていました。その神経質で粗い線により肉体的な特徴が誇張され、精神状態の不安定さ、表現主義における脆さが明確に表れていました。彼の美しいとはいえない裸の絵やスケッチはエロチシズムというより、むしろ運命や悲劇を感じさせるものでした。

ウィーンの 郊外へ

森を歩きワインを味わうウィーンの森、
ドナウ川クルーズのハイライト、ワッハウ渓谷。
そしてハイドンゆかりのアイゼンシュタットへ。



ウィーンの森

ウィーンの東部を除く北・西・南をぐるりと取り巻くウィーンの森は、市街地の3倍ほどの面積、約1350km²の広さを持っています。アルプス山脈の一部をなしている豊かな丘陵地帯とドナウ川の河畔地帯ではブドウ畑が広がり、ベートーヴェンやシューベルトゆかりの歴史ある町々が点在しています。グリーンツィングは、ウィーン市内ながらホイリゲ(ワインの居酒屋)が何軒も並ぶワインの産地。シュランメル音楽を聴きながら新酒のワインを楽しむのは、ウィーンならではの夜の過ごし方です。ハイリゲンシュタットはベートーヴェンゆかりの地で、博物館や住居、記念像が点在し、田園交響曲の構想を得たベートーヴェンの小路が残っています。プファール広場の住居は、ホイリゲになっています。**アクセス:** グリーンツィングへはショッテントアから市電38で終点まで約30分。ハイリゲンシュタットのベートーヴェン博物館へは、ショッテントアから市電37を終点で降り、徒歩5分です。

バーデン・バイ・ウィーン

ウィーンから南に20km、ウィーン郊外の温泉保養地バーデン・バイ・ウィーンは、古くはローマ時代から温泉が利用されていました。ウィーンの森南部一帯には、温泉地や名高いホイリゲの名所、趣深い史跡などが交錯します。19世紀初頭に皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が夏の滞在地として以来、バーデン・バイ・ウィーンは急速な発展を見せました。19世紀末には、ウィーンの上流階級、国内外の王侯貴族や芸術家などのサロンとなりました。市内には清楚で優雅なビーダーマイヤー時代の家並みが残り、当時の面影が今も漂います。広大な公園「クアパーク」では、花と緑の中にハプスブルク家の人々をはじめ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ランナー、シュトラウス、ミレツカーなど数多くの記念碑が立っています。

2021年7月、ユネスコはこのバーデン・バイ・ウィーンを含む7カ国11の温泉都市を「欧州の大温泉保養地」として世界文化遺産に登録しました。

ドナウ川

ローマ帝国の国境線

全長約5500kmにも渡るローマ帝国の国境線を示す防壁群はリメス(またはリメス)と言い、その内ドナウ川流域に築かれたドナウリメスは、2021年7月にユネスコ世界遺産に登録されました。それによりオーストリアのドナウ川沿いに見られる城壁遺跡に再び焦点が当てられました。

石を積み上げ、城壁を造り上げたローマ時代の考古学的記念碑は、オーバーエステライヒ州、ニーダーエステライヒ州、ウィーンのドナウ川流域357.5kmの区間に見られます。これらの地域にはローマの軍事建築が部分的によく保存されたモニュメントとして点在し、その歴史的景観が特徴ある文化街道を形成しています。全体のローマ帝国国境の中でも、オーストリアに残るそびえ立つ要塞の多くは優れた状態にあります。

見どころを上流の方から言うと、エンゲルハルトツェルのローマの砦オーバーランナ、マウテルンのローマ塔、ウィーンのミヒャエルブラッツ広場のローマ遺跡、ウィーンのホアー・マルクトのローマ博物館、トライスマウアーの印象的なローマ門、または印象的なローマの町カルヌトウムなどです。

ワッハウ渓谷

ドイツの黒い森を起点に、オーストリアや東欧を抜け黒海まで続くドナウ川。全長約2800kmにもよぶこの大河の一番の見どころは、メルクからクレムスにいたる世界遺産のワッハウ渓谷。その魅力を存分に楽しみたいのなら、ドナウ川クルーズがおすすめです。ウィーン中央駅から準急列車で約1時間、パステル色の家並みが美しいメルクの町から出発します。メルク修道院を見学してからクルーズへ。



丘陵に広がるぶどう畑や壮麗な古城などが目の前に迫ってきます。川沿いにはリースリングという白ワインの産地ヴァイゼンキルヒエンやシュピッツ、中世都市デュルンシュタインなど見どころもたくさん。終点のクレムスの対岸の丘にはゲットヴァイク修道院がそびえています。

運航期間: クルーズ船の運航期間は4月上旬～10月末まで。それ以外の期間は、メルクやデュルンシュタイン、クレムスの町々を列車で訪ねます。ウィーンからは便利な観光バスも出ています。

アイゼンシュタット

ハンガリーと国境を接するブルゲンランド州の州都アイゼンシュタットは、ウィーンの南約55kmにあり、車で45分、バスで1時間ほどの落ち着いた瀟洒な小都市です。ここはハイドンの主君として知られる大貴族エステルハーゼ侯の城下町でした。エステルハーゼ一宮殿、ハイドン博物館、ハイドン教会とも言われているベルク教会、マルティン聖堂が主な観光スポットです。

1766～1778年にハイドンが住んだ家は、現在ハイドン博物館となっており、大作曲家の遺品や絵画、楽譜、当時のピアノなどが展示されています。ハイドンの生家はアイゼンシュタットから近いライタ川沿いの村ローラウにあり、こちらも記念館として一般公開されています。

近郊には、ユネスコ世界遺産のノイジードラーゼー湖、湖上オペレッタで有名なメルピッシュ、コウノトリのコロニーで知られるルスト、フランツ・リストの生家があるライディングがあります。

ザルツブルクの 見どころ

モーツァルトの生誕地で
『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台。
世界でもっとも美しい都市のひとつ。



ザルツブルクは、モーツァルトの故郷、『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台として知られ、世界でもっとも美しい都市のひとつに数えられる古都で、ユネスコ世界文化遺産にも登録されています。

ホーエンザルツブルク城 メンヒスベルク山の上にそびえ立つ町のシンボル。中世の城塞建築としては中部ヨーロッパで最も良く保存されているもののひとつです。豪華な装飾で彩られた大司教の居間や黄金の間は圧巻。「ザルツブルクの雄牛」と呼ばれる大オルガンがあり、モーツァルトの城塞コンサートも開催されています。博物館には昔の武具や工芸品などが展示されており、日本語音声ガイドもあります。テラスからはアルプスの山並みと市街のパノラマが楽しめます。

MAP P.39 B-2

www.festung-salzburg.at

メンヒスベルク ザルツァッハ川沿いに南西に伸びるメンヒスベルクは、ザルツブルク市民の憩いの山。春にはブナやカエデ、菩提樹、樫などの様々な形をした木々が、メンヒスベルク全体にやわらかな新緑の輝きを放ち、夏には燃えるような色とりどりの葉の海が広がります。

歩いて登るルート、階段を経由するルートなど、東西南北あらゆる方向から行けるメンヒスベルクですが、最も快適な方法はメンヒスベルク・エレベーターです。以前は岩壁の外側に設置されていたが、今では山の中を通って上るように造られています。このエレベーターを利用すると山頂にはザルツブルク現代美術館があり、古典モダニズムに関する展示を鑑賞することができます。

大きなテラスと素晴らしい眺め的高级レストラン「M 32」や「ホテル・シュロス・メンヒシュタイン」、お腹を空かしたハイカーたちに人気のソーセージ屋台「ビュッフェ・ツァ・リヒターヘーエ」、伝統的なオーストリア料理を堪能できる「シュタットアルム」など、グルメを楽しめる食事処が満載です。

MAP P.39 A-1, B-1,2

オーストリア/ポケットガイド



ミラベル庭園／宮殿 風光明媚なこの庭園では、ザルツァッハ川越しに旧市街のホーエンザルツブルク城とドームや数々の教会の尖塔の美しい姿を眺望することができます。ギリシャ神話を題材にした石像、水しぶきが輝く噴水、色彩豊かな花々などが、訪れる人々を魅了します。園内のほぼ中央に位置するミラベル宮殿は、大司教ヴォルフ・ディートリッヒが愛人サラモアルトのために建てた別荘です。内部の大理石の間は、室内楽コンサートや結婚式など催し物の会場として使用されています。

MAP P.39 A-1

ドーム (大聖堂) バロック様式とローマ風の建築様式が見事に調和した華麗な教会。大司教マルクス・シテイクスのもとで建築家ソラーリによって1614年に建設が開始され、1628年に完成しました。モーツァルトが洗礼を受け、カラヤンの告別式が行われたことでも知られます。約6000本のパイプからなるパイプオルガン、ドーム博物館が見どころ。正面のドーム広場では毎年夏、ザルツブルク音楽祭の恒例演目『イエーダーマン』が上演されます。

MAP P.39 B-2

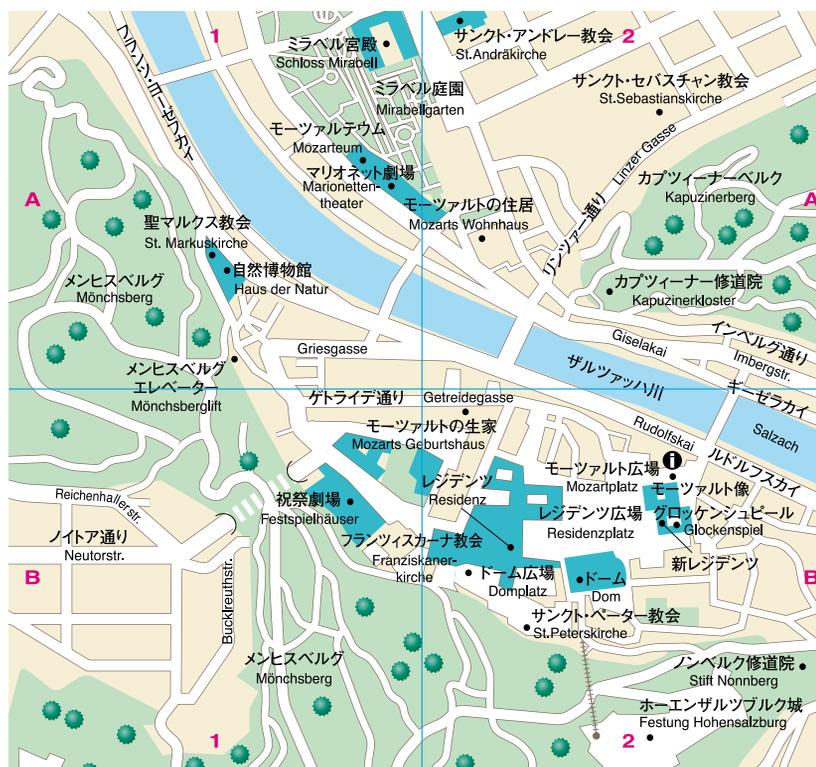


FOTO © Tourismus Salzburg GmbH



モーツァルトの生家 1756年、旧市街一番の目抜き通りであるゲトライデガッセ通り9番地で、モーツァルトは誕生しました。色鮮やかな黄色い建物は現在、記念館として一般に公開されています。モーツァルトが使用していた子供用バイオリン、コンサート用バイオリン、ピアノ、モーツァルト家の肖像画と書簡などが展示されています。

[MAP] P.39 B-2

www.mozarteum.at

ゲトライデガッセ通り 15世紀建築の市庁舎、中世以来のギルドの伝統を受け継ぐ様々な形をした鉄細工の看板が楽しい、独特の雰囲気を出し出すショッピングストリート。世界でもっとも美しい通りの一つに数えられるでしょう。この通りには、買い物にもウインドウ・ショッピングにも楽しい様々なお店が多数軒を並べています。年中旅行者の姿が絶えません。

[MAP] P.39 B-1,2

サンクト・ペーター修道院 オーストリア最古のベネディクト派修道院。映画『サウンド・オブ・ミュージック』にも登場しました。修道院内を飾る装飾品の数々は、宗教芸術として価値の高いものばかり。裏手に広がる墓地には、モーツァルトの姉のナンネルや旧友ミハエル・ハイドンが眠っているほか、初期キリスト教徒の祈禱のための洞窟「カタコンバ」は必見です。

[MAP] P.39 B-2

レジデンツ 歴代大司教の宮殿で、豪華な内部はガイドツアーで見学できます。レジデンツ広場の中央を飾る大噴水は、アルプス以北で最も美しいバロック噴水のひとつとされます。この広場では9月のルベルト祭やクリスマス市など、様々な催しが行われます。

[MAP] P.39 B-2

www.residenz-salzburg.at

ザルツブルクのドームクォーター ドーム(大聖堂)、サンクト・ペーター修道院、レジデンツなどを含む旧市街の見どころを巡るドームクォーターは、17世紀に造られた回廊を通じて見学することができる美術館巡回コースです。200年前と同様に重要な建物を繋ぐ回廊は美術館を超える見応えで、訪問者の知的好奇心を満たします。

この巡回コースにより、街を取り囲む丘陵の魅力あふれる新たな眺望と、素晴らしい建築物を一度に見ることが出来ます。バロック様式を代表する建築物の素晴らしい部屋の数々と、2000点ものバロック美術品を堪能することができます。

通行時間:火曜日を除き、毎日午前10時～午後5時まで、7月～8月は毎日

[MAP] P.39 B-2

www.domquartier.at

グロッケンシュピール 1702年に造られた、レジデンツの反対側にある新レジデンツの鐘樓。音程の異なる35個の鐘がついており、毎日7時、11時、18時に美しく鳴り響きます。

[MAP] P.39 B-2

祝祭劇場 大司教の廟舎を1926～28年に建築家クレメンス・ホルツマイスターが祝祭小劇場に改築、その後1956～60年にかけて再度ホルツマイスターによって大劇場が増築されました。2006年のモーツァルトイヤーには小劇場が改築され、「ハウス・フュア・モーツァルト(モーツァルト・ホール)」へと生まれ変わりました。夏のザルツブルク音楽祭のメイン会場としてよく知られています。また、映画『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台ともなったフェルゼンライトシュレーヤ祝祭大劇場の内部を、約1時間かけて見学するガイドツアーも実施されています。

[MAP] P.39 B-1

www.salzburgfestival.at

マリオンネット劇場 モーツァルト、シュトラウス等の有名なオペラや『くるみ割り人形』等のバレエが高度な技術によって演じられる人形劇。国際的にも人気が高い人形劇場です。

[MAP] P.39 A-2

www.marionetten.at

モーツァルテウム 1914年設立された国際財団法人で、音楽院とコンサートホールを備え、サマーアカデミーが開催されています。庭園にある「魔笛の家」はウィーンから移築されたもので、1791年この家でモーツァルトは『魔笛』を完成しました。魔笛の家は内部見学不可。

[MAP] P.39 A-2

www.mozarteum.at



マルカト広場のモーツァルト住居 モーツァルトが故郷ザルツブルクを捨てウィーンに向かうまでの7年間(1773年～1780年)を過ごした家。現在はモーツァルト一家の博物館になっています。日本語解説あり。

[MAP] P.39 A-2

ヘルブルン宮殿 旧市街から南へ7km、大司教マルクス・シティクスが作らせた宮殿です。見事なバロック庭園には水を利用した様々な愉快な仕掛けが施されています。思いがけない所から水が飛び出し、訪問者の歓声が絶えません。水力で動くミニ人形劇場もあります。4～11月オープン。

アクセス:市内からバス25番で20分

www.hellbrunn.at

レッドブル・ハンガー7 ザルツブルク空港には、7番目の格納庫と呼ばれる貝殻のような形をしたガラス張りの超近代的な建物があります。使用した1754個のガラスパネルは飛行機の発着によるどんな振動にも耐えられるよう設計されており、内部はレッドブルのエクストリームスポーツで活躍するF-1マシンや航空機などが展示されています。併設のレストラン「イカルス」は、ザルツブルクを代表する美食のスポットです。

www.hanger-7.com



FOTO © Tourismus Salzburg GmbH/ Bryan Reinhardt

FOTO © Tourismus Salzburg GmbH/ Günter Breitegger

ザルツブルクの 郊外へ

オーストリア屈指の景観を誇る
ザルツカンマーグートと国内最高峰グロースグロックナー、
中欧最大のホーエ・タウエルン国立公園へ。



ザルツカンマーグート

ザルツブルクの東に広がるザルツカンマーグートはオーストリア屈指の景勝地として知られています。1500～2000m級の山々に抱かれた高原内に、大小約50の湖が宝石のようにちりばめられている湖水地帯。この素晴らしい絶景は映画『サウンド・オブ・ミュージック』でも紹介され、多くの人々の心に今も残っています。マーラーやクリムトなど、音楽家や芸術家にも愛された地域です。

15世紀の古城（現在ホテル）が麗しい姿を水面に映してたたずむ「フッシュルゼー湖」、この地方の中で最も美しいといわれている湖「ヴォルフガングゼー湖」の湖畔の町サンクト・ギルゲンは、リゾート地として人気の高いモーツァルトゆかりの地。対岸のサンクト・ヴォルフガングの町はオペレッタ『白馬亭にて』の舞台となったホテルが残る有名な町でシャープベルク山へ上る登山鉄道も人気です。『サウンド・オブ・ミュージック』の結婚式の舞台となった教会がある「モントゼー湖」、レハールやブラームスゆかりの温泉地で皇帝の別荘カイザーヴィラがある「パート・イッ

シュル」、ユネスコ世界遺産に登録されている「ハルシュタットとダッハシュタイン地域」、クリムトゆかりのアッターゼー湖など、魅力的な湖や町が点在します。

アクセス: ザルツブルクからパート・イッシュルまでバスで約1時間30分。ここからサンクト・ヴォルフガングまではバスで約30分。ザルツブルクから列車でパート・イッシュルやハルシュタットへ行く場合は、アットナング・ブッフハイムで乗り換えます。

FOTO © Österreich Werbung / Lily Freudmayer



グロースグロックナー

標高3798mオーストリアの最高峰のグロースグロックナーは、初登頂以来200年以上経ったいまでも、数多くの神話と伝説が伝えられていることでも知られています。グロースグロックナーの名称の由来については、山の形が

鐘（グロック）に似ていたからだとする説、あるいは金の発掘（ゴルト・クロックン）に関係があるという説などがあります。いずれにせよ、グロースグロックナーはたいへん魅力ある山で、いまも昔も多くの人々を惹きつけ、オーストリア皇帝もその一人でした。1856年、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世は皇妃エリザベート（シシィ）とともに、この山の氷河を見物に訪れました。ハイリゲンブルートから4時間かけてひとつつの鞍部に達し、ここが「フランツ・ヨーゼフス・ヘーエ」と呼ばれるようになりました。皇帝はこの場所に2時間以上とどまり、オーストリア最大の長さ9.4kmのバステルツェ氷河の眺望をはじめ、グロースグロックナーの偉容に深い感銘を受けたと伝えられています。

グロースグロックナーの麓のハイリゲンブルートは、キリストの聖なる血が納められたといわれる聖ヴィンツェンツ巡礼教会で知られる山村です。伝説によれば、キリストの聖血（ハイリゲンブルート）を携えて旅していたビザンチン帝国の官吏が、この地の寒さで行き倒れになり、この人物と聖血のために教会が献堂され、それ以来、この村は巡礼地となりました。



FOTO © Österreich Werbung / Julius Silver © Coem Wiesjes

ホーエ・タウエルン国立公園

中央ヨーロッパ最大のホーエ・タウエルン国立公園は、ケルンテン州、チロル州、ザルツブルク州の3つの連邦州にまたがっている広大な国立公園です。面積1787km²のホーエ・タウエルン国立公園の中心を形作っているのは、オーストリアの最高峰グロースグロックナー山を含む高い峰が連なるアルプス山岳地帯、氷河、滝、広く深い森林地帯、渓谷、穏やかな村々、そして高山の動植物です。これが、人々を圧倒するようなホーエ・タウエルン国立公園の傑出した特色です。ここを訪れる人は、このたくい希な動植物の世界を、ハイキングや特別なイベントなどを通じて知ることができます。

この素晴らしい地域を堪能するには、様々なガイド付きツアーに参加するのもおすすめです。国立公園の自然保護官は、何時に行けば夜明けのアイベックスを見られるのか、どこへ行けばヒゲワシの巣を見つけられるのか、また、どの渓流へ探しに行けば金の痕跡が見つかるのかなど、正確な情報を詳しく教えてくれます。例えば、アイベックスやカモンカ、マーモットの足跡を辿るハーバツハ溪谷の「野生生物サファリ」や、発情期の雄鹿を夕暮れに観察するツアーでは、目的の動物と遭遇する確率がグッと上がります。ちょっとした瞬間に見られるものにこそ国立公園の秘密を垣間見る感動があり、ホーエ・タウエルンに圧倒されずにその真の姿に触れる事ができるのです。

グラーツの 見どころ

旧市街と郊外のエッゲンベルク城は世界遺産。
ウィーンに次ぐオーストリア第2の都市グラーツは、
知る人ぞ知るグルメの都。



ウィーンから南へ列車で約2時間半で行くグラーツは、南欧の雰囲気や漂う文化都市。赤い瓦屋根の並ぶ旧市街は今もなお中世のたたずまいを色濃く残しています。2003年欧州文化首都に指定されたことで、グラーツは他に類をみない独自性のある町に変化しました。古い街並みの中に極めて近代的な建物が溶け込んでおり、旧市街にアクセントを添えています。

シュロスベルク 13世紀の時計塔が立つ小高い山。グラーツはこの山を中心に開けていきました。山の上の城塞は、全時代を通じもともと堅固な城塞としてギネスブックにも載っています。19世紀初頭、ナポレオンさえも、この城塞を陥落させることはできませんでした。頂上へは石段を登ることもできますし、エレベーターを使うことも可能です。上には眺めの良いカフェ・レストランもあり、旧市街の大パノラマが楽しめます。

MAP P.46 A-1

州立武器庫 (ツョイクハウス) 州庁舎隣の武器庫は、トルコの襲撃に対する武器の常備庫として造られました。中世の鎧や鉄砲など1551年以降の武器3万点以上が保管されていており、今でもすぐに使えるほど整備されています。冬期は休館です。

MAP P.46 B-1,2

王宮 15世紀に皇帝フリードリッヒ3世が建て、後にその息子マキシミリアン1世が手を加え後期ゴシック様式に改修しました。王宮の主な部分は19世紀に撤去され、現在は州知事官邸となっています。最初の中庭を突き抜けた第3棟の脇には、1499年につくられた「二重螺旋階段」があります。ゴシック末期の石工芸術の傑作です。

MAP P.46 A-2

FOTO © Österreich Werbung / Julius Silver

グラーツの文化イベント

3月に行われる「ダイアゴナル」オーストリア・フィルム・フェスティバル、6月には高名な「シュティリアルテ」クラシック音楽祭、演劇フェスティバル、ストリート・パフォーマンス、人形劇「ラ・ストラダ」などの他、グラーツ・オペラハウス、シャウシュピールハウス劇場、ヒップなクンストハウス、または見事なバロック建築で知られるエッゲンベルク城で行われる様々な音楽公演がグラーツの文化イベントに花を添えています。

FOTO © Graz Tourismus / Tom Lamm, Harry Schiffer

オーストリア / ポケットガイド



中央広場と市庁舎 グラーツの街の中心。中央広場の真ん中には1878年に造られたヨハン大公像の噴水があります。これは、「シュタイヤマルクの王子」と呼ばれたヨハン大公を追悼するものです。丸屋根、時計、角型の塔を特徴とする市庁舎は、19世紀末から現在まで中央広場にその姿を誇っています。

MAP P.46 B-1

大聖堂 (ドーム) この聖堂は、皇帝フリードリッヒ3世が1438年から1464年に王宮用教会として造らせました。聖堂の南壁には、小さな張り出し屋根で保護された「苦難の絵」があり、1480年にシュタイヤマルクを襲ったベスト、トルコ人襲来、イナゴの大群という三つの苦難を表現しています。

MAP P.46 B-2

霊廟 (マウスレウム) 皇帝フェルディナント2世の霊廟。この皇帝は、当時オーストリアの覇者としてグラーツに滞在し、文化史上非常に価値の高いハプスブルク家の霊廟の一つをグラーツに造らせました。イタリアの宮廷御用達画家であったジョバンニ・ピエトロ・デ・ボミスの設計です。

MAP P.46 B-2

州庁舎 北イタリアの宮殿様式で建てられた州庁舎は、支柱の下方に見られる彫刻と豪華な回廊をもつルネッサンス様式の美しい中庭が特徴です。

MAP P.46 B-1,2

歴史的広場とロマンティックな小路 市庁舎が建つ中央広場、肉屋が多いフランツィスカナー広場、カフェが立ち並ぶメール広場、伝統と現代文化が融合したフェルバー広場、イベントで賑わうシュロスベルク広場はどれも明るい雰囲気、独特で魅力的な文化的風土を生み出しています。ヘレンガッセやシュポールガッセにはシックなブティックが、また、ザック通りには数多くの美術工芸専門店が並び、ショッピングや市内散策を楽しむことができます。

MAP P.46 B-1,2

クンストハウス グラーツ 建築家のピーター・クックとコリン・フルニエがこの印象深い建物を設計し、2003年に建設しました。このムーア川のほとりに建つ新しい現代建築とシュロスベルクの古い時計塔が生み出す独特のコントラストは、この街の象徴であり、そして、建設的で緊張感溢れる伝統性と前衛性の関係を具現しています。

MAP P.46 A-1



オーストリア / ポケットガイド



ムーアインゼル フランツィスカーナー広場から中央橋までは数歩しか離れていません。そこから、「ムーア・プロムナード」(ムーア川沿岸遊歩道)へ下りて行ける階段があります。この川辺の道は、ほんの少し休憩したり、あるいは、ちょっと川に足をつけてみたりするのに最適です。

また、欧州文化首都をきっかけに設計された「ムーアインゼル」は、新たな街のシンボルです。ニューヨークの芸術家ヴィト・アコンチの設計で、この「川辺に浮かぶ貝」が創られました。二本の栈橋によって川の兩岸に繋がれており、中には喫茶店と半円形劇場があります。

MAP1 P.46 A-1

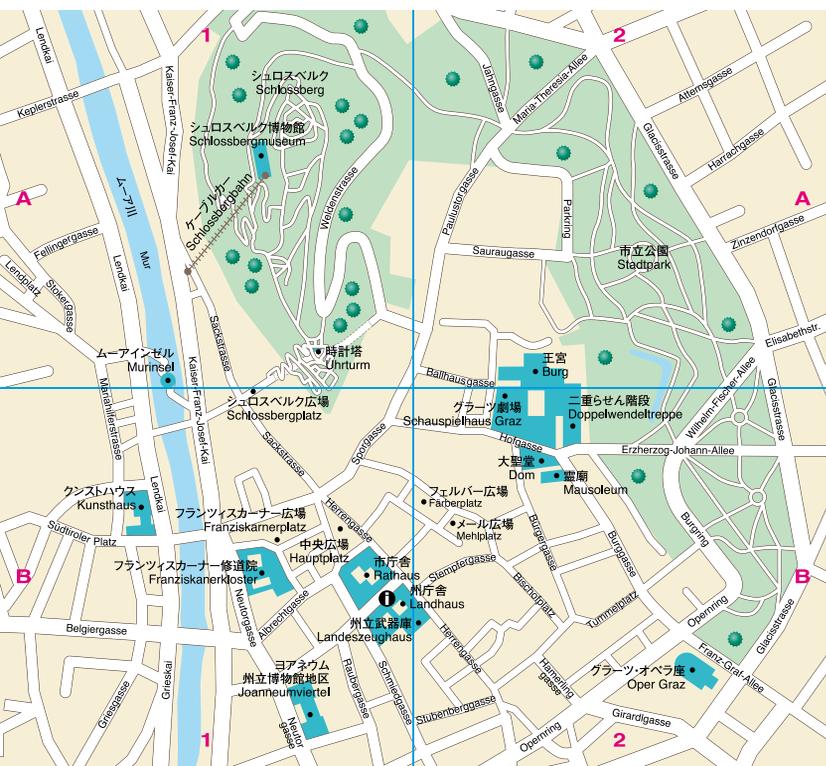
エッゲンベルク城 市内から市電1番で約15分西に行ったところにあり、この城はヨハン・ウルリッヒ・フォン・エッゲンベルク侯爵が中世の城を基に、1623年に居城として建設しました。豪華な内部はガイドツアーで見学できます(冬期は閉館)。貴重な日本の屏風『豊臣期の大坂』も現在ここに公開されています。また、城内にはアルテギャラリーが入っており500年以上にわたるヨーロッパの絵画、美術品が展示されています(年間オープン)。美しい「惑星の庭園」と公園は四季を通じて市民の憩いの場となっています。



FOTO © Graz Tourismus/ Nicolas Galati © Unesco Welterbe Schloss Eggenberg/ Christof Wagner

グラーツの郊外へ

州都をグラーツに置くシュタイヤマルク州は、森が豊かなことから「緑の州」とも呼ばれています。



南シュタイヤマルクのワイン街道

アルプスの大自然はもちろん牧歌的な村の風景も美しく、スロヴェニアと国境を接する南シュタイヤマルク地域はワインの名産地として有名です。エーレンハウゼンとロイチャハ間のおよそ25kmの街道は、シュタイヤマルクで最も大きなワイン栽培地域です。グラーツからは約50km、高速道路で約45分のところにあり、週末には人気の高い訪問先となっています。

このワイン街道には、プッシュェンシャンクと呼ばれるワイン生産者の直営店が点在しますので、ワイン愛好家にお勧めのルートです。例えば、ワイン居酒屋と宿泊施設のあるワイナリー「ケーグル」では、300年の歴史を持つ家屋を改築し、良質のワインを楽しんだ後、車で移動したくないゲストのために客室を提供しています。ワイン樽の間で夜を過ごせるユニークな客室もあります。グラーツから観光バスも出ています。

ローグナー パート・ブルマウ

日本でも知られているオーストリアの芸術家フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサーが設計したこの温泉ホテルの建物は、カラフルなファサードと黄金の丸屋根を備えた、まさに「住める彫刻」。自然の風景と現代建築を融合した憩いと安らぎの場です。自由な造形、流れる曲線、虹の色彩…と、波打つ丘陵風景は生きた総合芸術であり、温泉の湧き出す自然が見事に調和しています。

ヘルス&ウェルネスセットをはじめ、その他の医学療法、バラエティーに富んだスポーツやイベントプログラム、子供アドベンチャークラブやヨガなどの特別セミナーなどが揃っています。グラーツから温泉への送迎バスもあります(5泊以上は無料)。

FOTO © Rogner Bad Blumau

インスブルックの 見どころ

中世の面影をたたえる
ハプスブルク時代の帝都インスブルック。
チロル州は、夏はハイキング、冬はウインタースポーツの聖地。



インスブルックは、ハプスブルク帝国時代には「陰の首都」と呼ばれ、政治、経済、芸術の発展において、ウィーンに次ぐ中心地として栄えました。現在でも中世都市の面影を強く残しています。美しいアルプスの山々が町を取り囲み、自然と文化が融合する魅力的な町です。

黄金の小屋根 ハプスブルク家の黄金時代を築いた皇帝マキシミリアン1世の宮廷用観覧席として建てられた、後期ゴシック様式の張り出しテラス。金箔を貼った2657枚の瓦から“黄金の小屋根”と呼ばれています。欄干は砂岩のレリーフ、壁はフレスコ画が彩り、内部にはマキシミリアン1世の博物館があります。

MAP | P.49 A-1

ホーフブルク王宮 インスブルックの町の中心にあるハプスブルク家の2つ目の王宮。ウィーン以外に「ホーフブルク」と名付けられた王宮はここだけです。ジークムント大公が1460年に創建し、その後マリア・テレジアによって改築されました。華麗なシャンデリアや天井画で飾られた大広間は見逃せません。

MAP | P.49 A-1

宮廷教会 チロル民族博物館に隣接した教会で、マキシミリアン1世の像が置かれた楕円と28体のみごとなブロンズ像がある教会として有名です。デューラーのデザインしたアーサー王の像や、チロルの英雄アンドレアス・ホーファーの墓が堂内にあります。

MAP | P.49 A-2

凱旋門 1765年、後の皇帝レオポルド2世とマリア・ルドヴィカの婚礼を記念して建てられた凱旋門。しかし、喜ばしい祝典の最中、父である皇帝フランツ・シュテファン・フォン・ロートリンゲンが急逝。このため凱旋門の片側には婚礼の場面、もう一方には皇帝の死を悼む場面が描かれています。

MAP | P.49 B-1

ノルトケッテンバーン 市の北側に聳え立つノルトケッテ(2300m)へ、ホーフブルク王宮近くの駅からケーブルカーで約30分(フンガーブルク駅でロープウェイに乗り換え)で上ることができます。頂上のノルトパークからはチロルの400以上のアルプスの山々からグロースグロックナーまで眺望できる雄大なパノラマが広がります。ベルクイゼルのジャンプ台と同様、建築家ザハ・ハジドがデザインした4つの駅舎も必見です。

ベルクイゼル・ジャンプ台 オリンピックの町インスブルックのベルクイゼルの丘に建つスキージャンプ台。パノラマ眺望を楽しむカフェ、展望テラスからはパツチャーコーフェル、ノルトケッテ、ホーエ・ムンデなどのアルプスの山々が望めます。通年オープン。人気の観光名所です。

アクセス: 市内からベルクイゼル行の市電1番で15分



アンブラス城 インスブルック南東の近郊にあり、16世紀にチロルの大公フェルディナントが平民出身の愛妻フィリピーネ・ウェルザーのために建てた白亜の城。美しい自然公園の中にそびえる瀟洒な城館で、大広間や天井画は必見です。併設の博物館ではフェルディナント2世の代から伝わるハプスブルク家の美術品を展示しています。

アクセス: サイトシーアバスで訪れましょう。



FOTO © Österreich Werbung/ Julius Silver

インスブルックの 郊外へ

牧歌的な山の景色で知られるチロル州。
アルプスの渓谷美と素朴な人々と出会える
愛らしいチロルの町々へ。



チロル州は絵本の世界から抜け出てきたような愛らしい風景がどこまでも広がる理想郷です。インスブルックに滞在し、ローカル列車やポストバスを使って、美しい渓谷や町や村を日帰りで訪れてみましょう。

アルプバッハ

チロルならではの風物にひたることのできる村アルプバッハ。木造の家々の花一杯のテラスと緑の森はまるで絵葉書のような様子です。

ゼーフェルト

インスブルックにほど近く、三方を山に囲まれた標高1180m、人口2800人のリゾート。駅前から真直ぐにのびる並木道は絵のように美しく牧歌的なメルヘンの世界。

キッツビュール

中世の面影を色濃く残す旧市街地には古風な家々が並び、町中の随所で見られる古い城門もノスタルジックな旅情を誘います。冬はスキーのメッカ。夏はハイキングに最適な地です。北は標高1998mのキッツビューラーホルン、南には標高1650mのハーネンカムがそびえています。

シュトゥーバイタール

インスブルックに近い、チロル屈指の美しい谷。この渓谷の中心地はノイシュティフト。谷の最奥シュトゥバイヤーグレッチャーでは1年中氷河スキーを楽しめます。

サンクト・アントン

アルペンスキーの発祥地として知られ世界中のスキーヤーを魅了している町。スキー博物館もあります。夏はハイキングや登山のメッカで、お花畑をめぐるハイキングコースがお勧めです。

エッツタール

氷河に深く削られた谷の奥に位置するエッツタール渓谷。セルデンから3056mのガイスラッハ・コーゲルに上ると、チロル州最高峰のヴィルトシュピッツェをはじめ、氷河の山々を眺めることができます。また、最奥地のホーエムート展望台からは、雄大な山岳と大氷河を一望できます。

FOTO © TVB Südtirol/André Schönher (Zillertalregion)

旅に役立つ 基本情報

商店の営業時間

商店は一般的に、月曜日から金曜日は9時～18時(店により8時から)、土曜日は17時まで営業しています。ウィーンのショッピングセンター等は、平日20時まで開いています。業種や季節により営業時間は変更され、特にリゾート地のハイシーズンは時間が延長されることもあります。日曜日や祝祭日は基本的に休業しますが、ミュージアムショップや一部のおみやげ店はオープンしています。

オーストリアの免税システム

オーストリアでの買い物には付加価値税(MwSt.)が含まれていますが、条件を満たした外国の旅行者には、税金を免除する特典があります。通常、商品価格の約13%が払い戻されます。

オーストリアへのアクセス

- **飛行機** 日本からの直行便は、ANAとオーストリア航空が就航しており、その他、多くの航空会社が経由便で日本とオーストリアを結んでいます。詳しいスケジュールは各社のウェブサイトをご覧ください。また、従来の国内線に代わり、オーストリア航空とオーストリア連邦鉄道ÖBBが協力で運行する、環境にやさしい「エアレイルAIRail」が登場。ザルツブルク/リンツ/グラーツ～ウィーン空港間を結んでいます。ウィーン国際空港シュヴェヒャートの他、グラーツ、ザルツブルク、インスブルック、リンツ、クラーゲンフルトの6都市に空港があります。
- **鉄道** 隣接するオーストリア周辺諸国と、ウィーン及びオーストリア各地を快適なレイルジェットが結んでいます。全国に渡り鉄道網が整備されています。
- **自動車** オーストリアのアウトバーン及びその他の高速道路網は極めて良く整備されており、気ままな個人旅行には最適の交通手段です。高速道路は有料のため、利用にはヴィニエツト(ステッカー)が必要です。キオスク、ガソリンスタンドでも購入できます。 www.vignette.at

オーストリア政府観光局公式チャンネル

 **ウェブサイト**
www.austria.info

本誌に紹介されている各地の情報ははじめ、全国のご案内、イベントの紹介や有益なアドバイス、楽しい話題も豊富です。旅の計画づくりにお役立てください。

 **Facebook**
[@feelustriaJP](https://www.facebook.com/feelustriaJP)

オーストリアから直送の、あるいは日本国内でのオーストリアに関するホットニュースを発信しています。Facebook「オーストリアの休日」を有効にご活用ください。

 **Twitter**
[@ANTO_Tokyo](https://twitter.com/ANTO_Tokyo)

オーストリア関係の楽しい情報や、オーストリアの美しい写真を発信しています。

 **YouTube**
www.youtube.com/austria

冬はスキーや雪山のハイキングなどのアクティビティ、夏は緑の草原に行くハイキングや雄大な山岳登山、オーストリア料理を紹介する動画が各種リストアップされています。ビデオで躍動するオーストリアのハイライトをご覧ください。

 **メールニュース**
「オーストリアニュースレター」

オーストリア政府観光局では毎月一回、無料の「オーストリアニュースレター」を配信しています。このメールニュースでは、オーストリアで休日を過ごすためのヒントや、オーストリアに関する最新情報、日本におけるオーストリア関係のイベントなどの情報が得られます。ご登録はウェブサイトかQRコードで:

<https://www.austria.info/jp/Newsletter>





FOTO © Österreich Werbung/ Andreas Jakwerth

オーストリアの 持続可能な 休暇のスタイル

サステイナブル・ツーリズム（持続可能な観光）が提唱される現在、観光の大衆化による環境や文化への悪影響、過度な商業化を避けて観光地本来の姿を求めていこうとする考え方が進んでいます。

オーストリアは世界で最も成功している観光地の一つです。このオーストリアで過ごす「持続可能な休暇」とは、一体どんな意味なのでしょう？ それは、大切な資源を利用し、オーストリアのずば抜けて質の高い生活を次世代も体験できるように配慮して自然を楽しむことといえます。

オーストリアの国立公園で生態学的な多様性を知ったり、エコホテルに宿泊したり、CO₂を排出しない交通手段で移動したり、ピオレストランでオーガニック料理を味わうなどして、オーストリア式のサステイナブル・ツーリズムを体験してみてはいかがでしょうか。

 オーストリア
心弾むシンフォニー